

# 語彙・辞書研究会 第60回研究発表会

日時：2021年12月5日（日）午前11時00分～午後4時30分  
会場：オンライン開催

---

page

## [研究発表]

田坂康浩（拓殖大学大学院博士後期課程）

「敬称「さん」の組織名等への多用に見る敬意の揺れの考察」…… 1

山下洋子（立教大学大学院博士後期課程）

「歌舞伎のことばとしての「見得（みえ）を切る」」…………… 11

## [講演]

小松寿雄（埼玉大学名誉教授）

「「夢酔独言」の待遇表現—勝小吉を中心に」…………… 19

## [座談会]

「語彙・辞書研究会の30年」…………… 27

沖森卓也（立教大学名誉教授／語彙・辞書研究会 代表）

林 史典（筑波大学名誉教授／語彙・辞書研究会 前代表）

萩原好夫（元株式会社三省堂／語彙・辞書研究会 元事務局）

## 〈司会〉

木村義之（慶應義塾大学）

---

語彙・辞書研究会会則

事務局からのお知らせ

第61回研究発表会の開催について

研究発表者の募集について

# 語彙・辞書研究会会則

## 第1項（本研究会の目的）

日本語の意味・用法を、より厳密に分析し記述することをめざすとともに、広く言葉にかかわる諸分野をも含めて、語彙・辞書研究の発展をはかることを目的とする。

## 第2項（本研究会の活動）

第1項の目的を達するために、研究発表会・講演会の開催、機関誌の発行、その他必要な活動を行う。

## 第3項（研究発表会の開催）

原則として年二回開催する。

## 第4項（本会の事務局）

事務局は、千代田区神田三崎町 2-22-14 三省堂出版局内におく。

# 敬称「さん」の組織名等への多用に見る敬意の揺れの考察

田坂 康浩（拓殖大学大学院言語教育研究科博士後期課程2年）

## 1 研究目的

組織名への「さん付け」は以前からよく聞かれていたが、最近では、言及する会社が会話の場になくとも用いられることが多くなった。また、社内の部署名に「さん」付けをする表現も聞かれるようになったほか、「業者」や「他社」といった語にも「さん」が付けられているのを見聞きすることが多くなった（木村（2014）等）。

「さん付け」多用の背景には、これらの表現を用いないと「相手又は聞き手に対する敬意が足りない」と考える人が増えていることがあるのだろうか。そうであれば、組織名等に「さん付け」をしない「正しい表現」を用いている人が、「敬意の足りない表現を使う失礼な人」と見られている、又は今後、そのように見られるおそれがあるとの懸念が生じた。

「組織名等+さん」の多用が自分の周りの卑近な例に過ぎないのか、既に広まったか今後、広まるおそれのある現象かどうか、また、広まっているとすればどの程度かを突き止めるのが、本研究の目的である。

## 2 調査対象

本研究では予備調査として、国語辞典における敬称「さん」の語釈と初出時期を確認すると共に、国会会議録を用いて「組織名+さん」の発言開始時期と推移を確認した。

調査対象の選定に当たり、国立国語研究所の「日本語話し言葉コーパス」は、学会における講演・模擬講演等が全体の95%を占めるなど、フォーマルな独話を主とするコーパスであるため、最近の会話における「さん付け」を分析する本研究には不向きと判断した。代わりに、金融庁所管の金融審議会議事録を基にコーパスを作成し、「組織名+さん」及び「普通名詞+さん」の発言件数とその使われ方を分析することとした。

金融審議会議事録を調査対象に用いることにした理由は、①原則として2001年以降の審議会議事録が、要旨ではなく発言録として、金融庁ウェブサイトで公表されていること、②特定のテーマに係るフォーマルな議論の場における対話であること、③発言者が特定できること、④発言者が、学者、公務員、金融関係者、その他有識者と、多様かつ構成が明らかであること、⑤発言者の中で、特に学者及び公務員は、長期にわたって委員や事務局を務めることが多く、必要であれば経年の変化を追うことが可能であること、による。

調査対象期間は、2001年1月から2020年12月までの20年間、対象となる会議は、調

査対象期間に開催され金融庁ウェブサイトに掲載された全会議（ただし、一部議事録の公開のない部会等を除く。）で、総審議時間 871 時間を調査対象とした。審議時間は年によってばらつきがあるが、5 年ごとの平均をとると概ね年 40 時間台だった。

なお、調査期間の発言者総数は、1,059 人だった。

### 3 定義

#### 3.1 敬意と揺れ

文化審議会（2007）では、敬語は「社会的な立場を尊重して使う」ものであるとし、敬意を「必ずしも尊敬の気持ちだけではなく、その人の社会的な立場を尊重すること」の現れの一つとしている。そのため、「さん」を用いる相手の社会的な立場を尊重する行為を「敬意」と定義して、それがどのような場面で用いられ又は用いられてないかを分析する。また、井上（2007）では、「覚えやすい、インパクトがあるとかの理由で広がり、四分の一くらいが使い、気づく人が多くなった段階」を「誤用」、「騒がれても広がるものは広がり、半分くらいの人が使う段階」を「揺れ」、「更に使う人が増えて、四分の三くらいに使われる、優勢な言い方」を「慣用」と定義していることから、これを目安に研究を進めていく。

#### 3.2 組織名と普通名詞

本研究で「組織名」とは、省庁名（金融庁や経済産業省等）、業界団体名（日本証券業協会や全国銀行協会等）、企業名（野村証券、第一生命等）を指すものと定義した。また、「組織名」以外の名詞のうち、「理事長さん」や「会長さん」等の役職名や肩書、及び「蕎麦屋さん」や「本屋さん」等の店の業種を指す名詞以外の名詞を「普通名詞」と定義した。

### 4 先行研究

野口（2009）は、「日本語の丁寧語化は『様』と『さん』にどのような変化をもたらしたか」と題して「様」と「さん」の気になる用法とその背景について述べている。「さん付け」されていた人に「様」が付くことが一般化したことで、これまで人名に添えられていた「さん」が企業名等に付くようになった。当初、企業の同業者間の慣行だったものが、次第に、それを見聞きした学生に波及していったと結論付けた。

木村（2014）では、「さん」、「さま」の前接成分をいくつかの分野でまとめ、語例を掲げ、それぞれに「さん」、「さま」が付けられるか否かを記号で示した表を提示している。これは、「待遇価値の高い『さま』は付きうる前接成分が限定的であるのに対し、相対的に待遇価値の低い『さん』は比較的自由に前接成分と結合し、その範囲が広いと考えられている」として、人称詞等、親族、歴史上の人物名等、職業、等に分けて分類したものである。そのうち「～屋等」については、本屋、魚屋等の「～屋」は、「さん」が一般的に付けられるが、商社、新聞社等の「～社」及び本店、書店等の「～店」へのさん付けは、条件が満たされれば付くと分類している。また「～員等」については、駅員、栄養士、調理師、運転手には、「さん」

が一般的に付けられるが、同じ「～員」、「～師」、「～手」でも、銀行員、教師、歌手には「さん」が付かないのが一般的と分類している。

河・金井（2017）は、日本語母語話者の大学生に過剰敬語についての意識調査を行った。「大学生の A さんは、就職の説明会で司会者が『本日の説明会の順序は東芝さん、日立さん、日産さんでございます』のように会社名に『さん』をつけて紹介するのを聞いた」との設問を見てどう感じたか、表現の規範性と印象について尋ねたところ、表現が気にならず好印象と答えた人数が全体の 6 割を超えていることから、「現在、正用として認識されている表現」と結論付けた。

## 5 調査の概要

組織名にも「さん」が付く語釈を載せた最も古い辞書は、1995 年刊の『大辞泉』であるが、森田（1980）『基礎日本語：意味と使い方 2』にも「さん」が団体名等にも付く旨の記述が見られる。そのため、20 世紀の終わりには組織名に敬称「さん」を付けることが、一部の辞書に載る程度には一般的になっていたことが分かった。

次に「組織名+さん」の発言開始時期を調べるために、「国会会議録検索システム」を用いて、自由民主党に「さん付」をする国会議員の発言を調査した。自由民主党結党の 1955 年には既に自由民主党又は自民党への「さん付け」が見られ、その後 60 余年で政党名への「さん付け」件数は概ね増加していることが分かった。（稿末の図 1 参照）

## 6 調査結果及び分析

### 6.1 調査結果

#### 6.1.1 「組織名+さん」

##### 6.1.1.1 発言件数

金融審議会における「組織名+さん」の異なり語数は 343 件、延べ語数は 1,122 件あった。延べ語数の多い上位 5 例は「金融庁さん」の 136 件、以下、「東証さん」67 件、「ヤフーさん」23 件、「全銀協さん」23 件、「経済産業省さん」21 件だった。

次に、「組織名+さん」がどれくらいの頻度で使われているかその比率をみると、金融庁は延べ語数が多いためその「さん付け」比率は 6.2%にとどまっているが、他の上位 4 語は 1 割から 2 割で「さん付け」していることが判明した。また「組織名+さん」の延べ語数総数に占める「金融庁さん」の延べ語数の割合は 12.1%と、突出して多いことも判明した。

##### 6.1.1.2 発言件数推移

「組織名+さん」の発言件数は年によって大きなばらつきがあるため、2001 年から 5 年ごとの「組織名+さん」の延べ語数の平均の推移をみると、2001 年～2005 年 28.6 件、2006 年～2010 年 60.0 件、2011 年～2015 年 59.8 件、2016 年～2020 年 76.0 件と、年を経るご

とにほぼ増加していることが明らかになった。(稿末の図 2 参照)

### 6.1.1.3 発言者数

金融審議会において「組織名+さん」の発言者数は、総発言者 1,059 人の 27%に当たる 284 人だった。

「組織名+さん」の発言件数とそれが全体に占める割合をみると、人数では全体の 3.5% 弱に過ぎない上位 10 人で、「組織名+さん」の延べ語数の 2 割、全体の約 18%の上位 50 人で、「組織名+さん」の延べ語数の半数を占める等、「組織名+さん」を使う人にかなり偏りがあることが判明した。

また、金融審議会における発言者数とその職業構成比率、「組織名+さん」の発言者数とその職業構成比率をみる。職業構成比率をみる際、金融機関の役職員、及び日本証券業協会等の金融関係団体職員を「金融関係者」、また、金融庁、財務省、経済産業省等の省庁の職員を「公務員」とした。発言者全体の 42%を占める金融関係者が「組織名+さん」の発言者全体の 46%を占める一方、発言者全体の 22%を占める公務員は、「組織名+さん」の発言者全体の 10%に過ぎなかった。

## 6.1.2 「普通名詞+さん」

### 6.1.2.1 発言件数

普通名詞に「さん」を付けた用例をみると、「銀行さん」の 145 件を筆頭に、「会社さん」(124 件)、「企業さん」(109 件)、「業者さん」(70 件)、「金融機関さん」(69 件)と続き、異なり語数 335 件、延べ語数 1,801 件を数えた。異なり語数は上述の「組織名+さん」とほぼ同じだが、「普通名詞+さん」の延べ語数は「組織名+さん」の約 1.6 倍に上った。

### 6.1.2.2 発言件数推移

「普通名詞+さん」がいつ頃から頻繁に使われるようになってきたかをみると、年によってばらつきが多く傾向は一概には見出せないが、「組織名+さん」の用例調査と同様に 5 年ごとの平均の推移を見ると、2001 年～2005 年 40.2 件、2006 年～2010 年 92.4 件、2011 年～2015 年 111.2 件、2016 年～2020 年 116.6 件と推移し、2006 年以降、それまでの年 50 件以下から年 100 件前後に増加したことが分かった。(稿末の図 2 参照)

### 6.1.2.3 発言者数

金融審議会において「普通名詞+さん」の使用者数は、総発言者 1,059 人の 29%に当たる 305 人だった。

「普通名詞+さん」の発言者数とそれが全体に占める割合をみると、人数では約 3%強に過ぎない上位 10 人で、「普通名詞+さん」の延べ語数は 2 割、全体の約 13%の上位 40 人で、「普通名詞+さん」の延べ語数の半数を占める等、「普通名詞+さん」を使う人にかなり偏りがあることは「組織名+さん」と同様の結果だった。

## 6.1.3 「組織名+様」、「普通名詞+様」

組織名及び普通名詞(以下「組織名等」という。)への「さん付け」調査の早い段階から、

組織名等に「様」が付く用例が散見されたため、併せてその用例の件数や使われ方について調査も行った。

その結果、「金融庁様」、「楽天様」、「東証様」等、組織名に「様」を付けた異なり語数は85例、延べ語数157件、また、「企業様」、「加盟店様」、「ユーザー様」等、普通名詞に「様」を付けた語の異なり語数は92件、延べ語数は234件あった。

## 6.2 分析

6.1 調査結果では「さん付け」を組織名と普通名詞に分けて、その発言件数等をみてきた。

以下では「さん付け」にどのような傾向があるのか、「揺れ」はあるのか、あるとすれば何に対してどの程度あるのかを調べるために、必要に応じて「組織名+さん」と「普通名詞+さん」の別による違いを見るものの、基本的には、組織名と普通名詞を区別せずに、(1) 統一的な使われ方か否か、(2) 同席者への敬意の有無、(3) 同席者以外への配慮の有無、及び(4) 「さん付け」をされた組織名等が列挙された際の使われた方、についての分析を行った。

### 6.2.1 統一的な使われ方か否か

発言者が自身の発言で組織名等に「さん付け」する際、対象となった語全てに「さん」を付けているかどうかを調査した。

具体的には、まず、ある発言者が議長から指名され発言の機会が与えられてから自分の発言が終了するまでを「1ターン」と定義した。そして、その1ターン中、「さん付け」されたある語が常に「さん付け」されていた場合を「統一的」な使用とした。一方、「1ターン」中に同じ語が複数回使われているが、例えば、初回は「銀行さん」と「さん付け」しているにも関わらず、2回目以降は「さん付け」をしない用例について本研究では「不統一」な使用とした。また、1ターンの発話中、「さん付け」をした語が1回しか出てこなかった場合は、統一的な使われ方か否かを「不明」とした。

金融審議会における「組織名等+さん」が1ターン中どのように使われたかみてみると、「さん付け」延べ語数2,926件のうち、1ターン中に「さん付け」をした同一組織名等が複数回ない「不明」件数が全体の約51%を占めた。この「不明」を除いた1,442件のうち、統一的に「さん付け」が行われていたのが58%に当たる837件あり、また、不統一用例が約39%の561件あった。(稿末の表1参照)

このように金融審議会では1ターン中に複数回「さん付け」した発言の約6割が統一的に使われていることが調査結果から明らかになったことから、「さん付け」がかなり定着しているとも言える。しかしながら、約4割が不統一な使われ方をしている点には留意する必要がある。人に敬称を用いる場合、ある時「さん付け」をした人に再度言及する際、同じ人を、今度は呼び捨てにすることは通常ないため、「組織名等+さん」には、「敬意」を示す語としての用いられ方に「揺れ」が存在すると考えられる。

### 6.2.2 同席者への敬意の有無

ここで「同席者」とは、発言者と同じ審議会に参加している委員やオブザーバー等のことを言う。また、審議会の事務局を務める金融庁職員は常に審議会に参加しているので、発言

者が「金融庁さん」と言った場合、これは常に「同席者」として勘定した

一方、本研究では、普通名詞に「さん」が付いたものについても、それが同席者に対するものか否かを分析した。これは、例えば「銀行」といえば、預金の出し入れや融資を行う金融機関のことであるが、本研究では、対象の審議会の出席者と発言内容を確認し、同じ審議会に出席している銀行又は銀行業界を指していると判断したものを「同席」事例として勘定した。

「さん付け」の5年ごとの平均の推移をみると、2001年～2005年平均が68.8件であるのに対して、2006年～2010年が152.4件、2011年～2015年が171.0件、2016年～2020年が193.0件と増加している。

これを、「組織名+さん」と「普通名詞+さん」に分けてみる。「組織名+さん」の5年ごとの平均の推移をみると、その同席者に対する発言件数は、2001年～2005年21.6件、2006年～2010年37.4件、2011年～2015年31.2件、2016年～2020年57.6件、また、非同席者に対する発言件数は、2001年～2005年7.0件、2006年～2010年22.6件、2011年～2015年28.6件、2016年～2020年18.4件で、同席者以外に対しても「組織名+さん」が使われる傾向が増加してきたことが分かった。(稿末の図3参照)

また、「普通名詞+さん」の発言件数をみると、その同席者に対する発言件数は、2001年～2005年9.2件、2006年～2010年23.4件、2011年～2015年3.6件、2016年～2020年3.0件だったが、非同席者に対する発言件数は、2001年～2005年31.0件、2006年～2010年69.0件、2011年～2015年107.6件、2016年～2020年113.6件と、非同席の「普通名詞+さん」の使用件数が顕著に増加したことが判明した。(稿末の図4参照)

### 6.2.3 同席者以外への配慮の有無

金融審議会における発言で、組織名及び普通名詞への「さん付け」の延べ語数は2,926件だった。そのうち、審議会同席者への「さん付け」は、「組織名+さん」が739件、「普通名詞+さん」が196件の計937件だった。同席者以外の残りの1,989件について、発言者が「さん付け」の相手に対して何らかの「配慮」をしていたかに着目して再分類を行った。ここで「配慮」とは、3.1で定義した「相手の社会的立場を尊重する行為」である「敬意」よりも狭く「利害関係のある者又は組織への一種の心配り」とした。

なお「配慮」の有無の判断に当たっては、①(広い意味で)同業かどうか(公務員の場合は他省庁かどうか、また、企業の場合は(金融機関に対する事業会社ではなく)事業会社同士かどうか、等)、②顧客、取引先、業務提携先等の「利害関係者」かどうか、を基準に判断した。

具体的には、みずほフィナンシャルグループの発言者がSMFG(三井住友フィナンシャルグループ)に言及した際に「さん付け」したのが「組織名+さん」の例である。また、公務員が同席者以外に「配慮」して「さん付け」したのは、彼らにとっての「同業他社」である他省庁に言及したときのみで、これも配慮が働いた「組織名+さん」の例として扱った。

また「普通名詞+さん」の例としては、東京証券取引所の職員による「上場企業さん」の例がある。これは東京証券取引所にとって上場会社は、東京証券取引所に上場する際に上場



審査料といった手数料をもらう「顧客」に当たることから、一定の「配慮」が働いたと考えられる事例である。

このような分析を行った結果、「さん付け」対象に対する配慮が見られるのは、同席者（全例を「配慮した先」として勘定）937件、同席していない「さん付け」対象へ配慮した例237件の計1,174件で、金融審議会における「さん付け」事例2,926件の4割に相当した。「さん付け」件数の6割に当たる1,752件は、同席せずかつ「配慮」が認められない例である。

以上のことから、同席していない対象を「さん付け」する場合、そこには、同業他社や広い意味での顧客等、発言者と何らかのつながり（又は利害関係）があり、「配慮」する必要があるとの意識が働いていたと考えられるが、それは1割強にしか過ぎないことが分かった。（稿末の表2参照）

#### 6.2.4 「列挙時」の「さん」の扱われ方

ここで「列挙時」とは、名詞が例えば、金融庁、農水省、経産省と並んだ時のことを言う。この時「さん」がどのように付けられるか、具体的には、「金融庁、農水省、経産省さん」と列挙された名詞の一部のみに「さん」が付くのか、それとも、「金融庁さん、農水省さん、経産省さん」と各名詞が「さん付け」されるのかに着目した。

さん付け事例の5%弱が列挙事例だが、金融審議会ではその三分の二の名詞にそれぞれ「さん」を付けていた。換言すれば、列挙されたときに三分の一は列挙された名詞の全てに「さん」が付けられていないことを意味する。人名の場合、例えば、田中、鈴木、佐藤に敬称を付けて呼ぶ場合には必ず「田中さん、鈴木さん、佐藤さん」と呼び、「田中、鈴木、佐藤さん」とは呼ばないことを考えると、「組織名等+さん」には敬意の揺れが存在し、尊敬語としての機能に欠ける点があることを示していると考えられる。（稿末の表3参照）

## 7 まとめ

本研究で明らかになったことをまとめると、以下のとおりである。

第一に、組織名等に「さん付け」を行う話者の数の多さと多様性が確認できた。

金融審議会における発言者総数1,059人中、組織名に「さん」を付けたのは約27%に当たる284人、また普通名詞に「さん」を付けた人は約29%に当たる305人だった。また、様々な職業の人が組織名等に「さん付け」を行っていることが明らかになった。

冒頭、研究目的で筆者が呈した「自分の周りの卑近な例に過ぎないのか」との疑問に対しては、「卑近」な例ではなく、多くの人を使用していることが分かった。しかしながら「組織名等」を「さん付け」した人の数だけで見ると、まだ3割程度の人しか用いていない「揺れ」の段階にあると考えられることが本研究から得られた答えである。

第二に、組織名等への「さん付け」件数が増加傾向にある。

金融審議会では、年によるバラツキはあるものの、対象期間の5年平均の推移から着実な増加傾向が見てとれる。特に、普通名詞への「さん付け」は2006年以降件数が大幅に増加し、その後、高水準を維持している。

第三に、敬称「さん」に敬意の「揺れ」が確認できた。

発言者が発言の中で「さん付け」した対象を常に「さん付け」した「統一的」な使用例は、調査の結果、6割程度だった。前述の、「さん付け」をする発言者が全発言者の3割程度であることと併せ、四分の三くらいに使われる「慣用」の段階にまでは至らず、まだ「揺れ」の段階にあると言える。また、人名に敬称を付ける際には、通常、上述のブレはないと考えられることから、組織名等への「さん付け」には、「尊敬語」としての働きが十分に備わっているとは言い難い。このことは、列挙事例分析からも明らかである。すなわち、複数の組織名等を並べて発言する際、「さん付け」をしない例が総列挙事例の三分の一もあることが今回の調査で確認できたことから、組織名等につける敬称「さん」には「尊敬語」的な役割が薄いと思われる。

同席者への「さん付け」が増加しており、その場にいる人に対して「敬意」を払う傾向は高まってきていることが確認できた。また、その場にいない対象に対しては、具体的な対象を示す組織名ではなく、普通名詞に対して「さん付け」する例が増加している。金融関係者は相対的に組織名等に「さん付け」を行う傾向が高く、公務員は低いといった違いはあるものの、自分の品格を保持する「美化語」的な役割が敬称「さん」に強まっているためと考えられる。

冒頭の研究目的で筆者が呈したもう一つの疑問である「組織名等+さん」を使わない人に対する周囲の見方については、金融関係者、金融関係の規制監督を行う公務員が多数を占める、本研究で用いたコーパスをもって一般化は出来ないが、まだ「揺れ」の段階にある現時点では、「組織名等+さん」を使わなくとも周囲から「敬意又は配慮の足りない表現を使う失礼な人」とは見られていないと考えられる。

## 参考文献

- 井上史雄 (2007) 『その敬語では恥をかく』 PHP 研究所  
菊池康人 (1994) 『敬語』 角川書店 (再刊：講談社学術文庫、1997)  
木村義之 (2014) 「敬語接尾辞「さん」「さま」の用法再考」『国文学踏査』 26 大正大学  
国文学会 pp.266-282  
野口恵子 (2009) 『バカ丁寧化する日本語 敬語コミュニケーションの行方』 光文社  
河正一・金井勇人 (2017) 「過剰敬語の規範性と印象について—大学生への意識調査から—」『埼玉大学日本語教育センター紀要』 11 pp.15-27  
文化審議会 (2007) 『敬語の指針』  
文化庁 (2017) 「平成 28 年度『国語に関する世論調査』の結果の概要」  
前川喜久雄 (2015) 「『日本語話し言葉コーパス』の概要」国立国語研究所  
森田良行 (1980) 『基礎日本語：意味と使い方 2』 角川書店

## ウェブサイト

- 金融審議会 [https://www.fsa.go.jp/singi/singi\\_kinyu/base.html](https://www.fsa.go.jp/singi/singi_kinyu/base.html)  
国会会議録検索システム <http://kokkai.ndl.go.jp/>

## 国語辞典

『日本国語大辞典 第二版』、『国語大辞典』、『角川国語大辞典』、『国語大辞典 言泉』、  
『学習国語大辞典 第二版』、『新辞林』、『講談社カラー版日本語大辞典 第二版』、  
『大辞泉 第二版』、『広辞苑 第七版』、『大辞林 第四版』、『旺文社標準国語辞典 新訂版  
重版』、『新潮国語辞典—現代語・古語—第二版』、『新潮現代国語辞典 第二版』、  
『明鏡国語辞典 第三版』、『岩波国語辞典 第八版』、『新選国語辞典 第九版』、  
『集英社国語辞典 第3版』、『新明解国語辞典 第八版』、『旺文社国語辞典 第十一版』、  
『三省堂国語辞典 第七版』、『学研現代標準国語辞典 改訂第3版』、『現代国語例解辞典  
第五版』、『学研現代新国語辞典 改訂第六版』、『基礎日本語辞典』

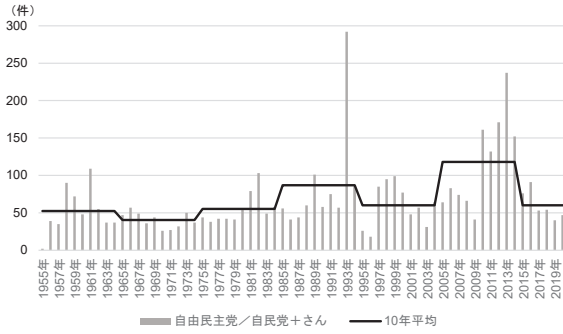


図1 「自由民主党/自民党+さん」の発言件数とその10年平均推移

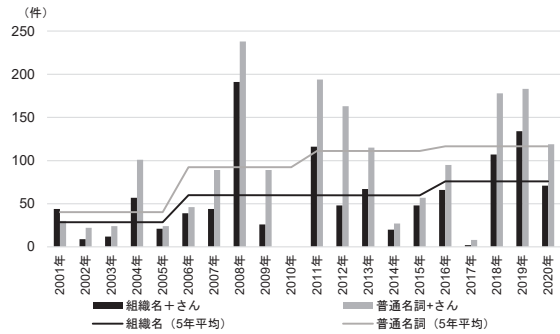


図2 「組織名+さん」、「普通名詞+さん」の発言件数及び5年平均推移

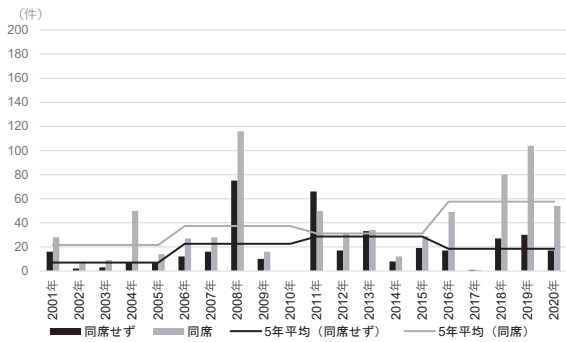


図3 同席か否かによる「組織名+さん」の発言件数の推移

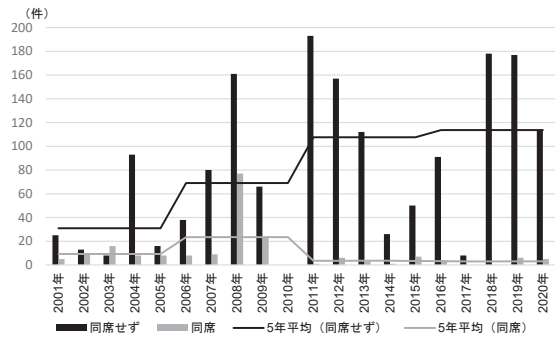


図4 同席か否かによる「普通名詞+さん」の発言件数の推移

表1 「組織名等+さん」の1ターンの発語中の発言件数

	件数	比率	「不明」を 除いた件数	「不明」を 除いた比率
不明	1,484	50.7%		
統一的	837	28.6%	837	58.0%
不統一	561	19.2%	561	38.9%
その他	44	1.5%	44	3.1%
計	2,926	100.0%	1,442	100.0%

表2 「さん付カ」対象の同席の別と配慮の有無

同席か否か	件数	配慮の有無	件数	名詞の種類	件数
同席	937 (A)	配慮あり	937 (D)	組織名+さん	739
				普通名詞+さん	196
同席せず	1,989 (B)	配慮あり	237 (E)	組織名+さん	105
				普通名詞+さん	132
		配慮なし	1,752 (F)	組織名+さん	278
				普通名詞+さん	1,474
計	2,926 (C)		2,926		2,924

$$((D)+(E))/(C)=(937+237)/2,926=40.1\%$$

$$(F)/(C)=1,752/2,926=59.9\%$$

$$(E)/(B)=237/1,989=11.9\%$$

表3 列挙時の「さん付カ」の使われ方

項目	列挙事例 ではない	列挙事例	列挙事例	
			A、B、Cさん	Aさん、Bさん、 Cさん
件数	2,687	135	47	88
比率	95.2%	4.8%		
列挙事例比率		100.0%	34.8%	65.2%

## 歌舞伎のことばとしての「見得（みえ）を切る」

山下 洋子（立教大学大学院博士後期課程）

### 1. はじめに

「見得」は動詞「見える」の連用形「見え」が名詞化し、「歌舞伎の演技・演出の一。劇的感情が高まったとき、俳優が、一時その動きを静止してにらむようにポーズをとること」（『大辞林第4版』・2019、以下『大辞林』）をいう。「見得」の表記は当て字である。歌舞伎で俳優が「見得」のポーズをとることを「見得を切る」といい、そこから慣用句として自分を誇示することを言うようになったと言われる（小林（2015）、p. 123）。しかし、歌舞伎では「見得を切る」とは言わず、「見得をする」というのが本来であるという指摘が演劇評論家によってされる。戸板康二（演劇評論家・作家、1915-1993）は、『新版歌舞伎事典』（2011・平凡社）の「見得」の項目に次のように書いている。

動詞としては〈見得をする〉が正しいが、〈大見得をきる〉ともいう。

服部幸雄（歌舞伎研究家、1932-2007）も次のように述べている。

「見得を切る」と「とんぼを切る」という言い方は、いずれも俗用とされる。正しくは「見得をする。見得を極（き）める」「とんぼを返る」というべきところを、いつのころからか「切る」というようになったというのである。（服部（1999）、p. 59）

しかし、演劇評論家の指摘には、歌舞伎でどのように「見得をする」が使われているのかが示されておらず、伝統的な用法を守り、規範性が強いと考えられる歌舞伎の専門用語において「する」から「切る」に変化するということがあるのか疑問を感じる。

そこで、本稿では、歌舞伎において、どのように「見得を+動詞」が使われていたのか、その中には「見得を切る」がなかったのかを調べ、「切る」が使われていなかったというのであれば、いつごろから「切る」が使われるようになったのか、また、「切る」が使われるようになったのはなぜなのかを考える。

### 2. 本稿の資料

歌舞伎において「見得を+動詞」がどのように使われてきたのか、その実例を調べるために、本稿では、幕末から大正生まれまでの歌舞伎俳優によってまとめられ、明治時代から戦後までに発行された「芸談」を資料とする。

芸談は「芸道に関する話。主として芸の秘訣や苦心談をいう」（『大辞林』）。本稿では、『大辞林』掲載の意味における芸談のほかに、歌舞伎俳優の「自伝」「評伝」「随筆」も含

めた64冊を「芸談」として取り上げる<sup>注1</sup>。資料名は注1に示す。64冊のうち、幕末生まれの俳優によってまとめられた芸談は13冊、明治生まれの俳優によるもの42冊、大正生まれの俳優によるもの9冊である。発行年は、明治時代発行のものが2冊、大正時代に発行されたものが1冊、残りは、昭和にはいって発行されたものである（戦前発行のものは20冊、戦後発行のものは41冊）。

歌舞伎俳優による芸談は江戸時代にもあったが、江戸時代のものは俳優の逸話を集めたものであるうえに、数も多くない<sup>注2</sup>。また、今回は、伝統的な「見得+動詞」の用例を調べることを目的とするため、昭和、平成生まれの俳優の芸談も含めない。歌舞伎の芸談には自筆のものと聞き書きのものがあるが、本稿ではどちらも取り上げる<sup>注3</sup>。

### 3. 歌舞伎において「見得」はどのように使われていたのか

#### 3.1 芸談における「見得+助詞+動詞」のパターン

今回調べた芸談の中で「見得」は、のべ340例あった。表1に「見得+助詞+動詞」（見得+動詞も含む）の形で「見得のポーズをとること」の意味で使われているもの192例を助詞別にまとめる。「ミエ+ヲ+V」はもっとも多く154例で、特に「見得をする」が多い。また、「見得を切る」よりも多い例に「見得になる」がある。「見得を切る」も使われているが、「見得をする」の5分の1の使用に止まっている。

表1 芸談における「見得+助詞+動詞」の使用例（用例が多い順・全340例中192例）

タイプ	数	分類
ミエ+ヲ+V	154例	ミエヲ {スル(125例)/キル(25例)/ヤル(2例)/ オエル(1例)/ツトメル(1例)}
ミエ+ニ+V	27例	ミエニ {ナル (27例)}
ミエ+デ (ニテ) +V	7例	ミエデ {キマル(6例)/トマル (1例)}
ミエ+V	4例	ミエ {スル(3例)/キル(1例)}

今回調べた芸談の中で、「見得を切る」が使われているもっとも古い例は、4代目尾上松助（1843-1928）による『松助芸談』（1928）である。

先代萩で、仁木が**引込みの見得を切る**時、体を反らせて、揚幕を見込むのが本当の型

だといふが、さういふものかいと、お訊ねになつた人がありました。(p. 95)

このほか、幕末生まれの俳優の芸談に「見得を切る」が使われている例は3例ある。7代目市川中車(1860-1936)による芸談『中車芸話』(1943、同様の内容が『目黒談話』(1936)にもある)と四国地方で旅回り俳優をしていた実川八百吾郎(1866-?)による『実川八百吾郎芸談(舞台九十年)』(1961)である。

「見得をする」の古い用例は、5代目尾上菊五郎(1844-1903)の芸談である。

極めの付いた弁天小僧、(ボンと右の手に持った煙管を下に置き、其手にて左の胡座して居る足を掻き寄せ左の肌を脱いで) 菊之助たア己が事だと**見得をする**ので御座います。(『尾上菊五郎自伝』(1903)、p. 17)

芸談の出版年別の「見得」の使用をまとめる。明治、大正時代に出版された芸談は3冊あり、「見得をする」(7例)のみが使われている。「見得をする」以外の用例が使われているのは昭和に発行された芸談である。それらの発行年を戦前と戦後とに分けて、「見得をする」「見得を切る」の割合(各発行年代の「見得のポーズをする」という意味の「ミエ+助詞+動詞」の用例中における「する」「切る」それぞれの割合)を示す(表2)。

**表2 「見得をする」「見得を切る」の割合(昭和期発行のもの)**

	昭和(戦前)発行	昭和(戦後)発行
「見得をする」	59% (66例中39例)	69% (119例中82例)
「見得を切る」	8%(66例中5例)	18% (119例中21例)
その他	33% (66例中22例)	13% (119例中16例)

いずれも、「見得をする」が多いものの、戦後になると「見得を切る」の使用が増える。特に、この「見得を切る」の使用は、大正生まれの俳優による芸談に多い(表3)。

**表3 「見得をする」「見得を切る」の割合(年代別)**

	幕末生まれ	明治生まれ	大正生まれ
「見得をする」	65% (20例中13例)	74% (149例中110例)	22%(23例中5例)
「見得を切る」	20% (20例中4例)	7%(149例中10例)	52%(23例中12例)
その他	15% (20例中3例)	19% (149例中29例)	26% (23例中6例)

1953年発行の『芸能辞典』（東京堂）には大正生まれの演劇評論家である戸板康二によって「動詞としては「見得をきる」という」と書かれている<sup>注4</sup>。

明治生まれの渥美清太郎（演劇評論家、1892-1959）のまとめた『日本演劇辞典』（1944・新大衆社）には「見得をする事を睨む（中略）と云ふ」とある。同じく明治生まれの8代目坂東三津五郎（1906-1975）は、「見得を切る」という言い方について次のように批判的に述べている<sup>注5</sup>。

越後獅子と言え、トンボ返りを、トンボを切る、見得を切る、なんて言葉は以前芝居の中では使わなかった。半可通の先生方が言い出した言葉で、トンボをきるとか、見得をキルなんて聞いただけで、情けなくて汗が出る。

（『歌舞伎花と実』1976・玉川大学出版部、p. 112）

こうしたことから、「見得を切る」の使用は明治生まれと大正生まれを境にしており、昭和、特に戦後以降に多く使われるようになっていくことがわかる。

次に、「見得を切る」が使われるようになった理由を考える。また「切る」と「する」と2とおりの言い方が使われる場合、2つの言い方に意味の違いはないのかを検討する。

### 3.2 「見得を切る」が使われるようになった理由

歌舞伎界では1945年から1950年に、明治に生まれ、大正から戦前にかけて活躍した名優たちが次々に亡くなり、世代交代が起こった。その後、歌舞伎界で中心になって活躍したのが大正生まれの俳優である。

「見得を切る」が小説や新聞など歌舞伎俳優以外のことばとして使われる例は、大正から昭和にかけて現れる。小林（2015、p. 124）によれば、与謝野晶子『帰ってから』（1913）に「見得を切る」が使われているのが、小説などに現れる古い例である。

鏡の前は一寸嘘坐して中を覗くと、今の紫の襟が黒くなった顔の傍に、**見得を切った**役者のやうに光って居た。

「青空文庫」（[www.aozora.gr.jp](http://www.aozora.gr.jp)）において「見得を」を検索した。48件の用例があり、そのうち「見得を切る」は44件である。牧野信一による『父を売る子』（1924）にある「お神楽の役者のやうな**見得を切つて**點頭いた」というのが古い用例である。

新聞では、1919年6月22日の読売新聞、新派の劇評に「大束な見得を切つて百円札を投（ほう）り出し」とある（ヨミダス歴史館を使用）。朝日新聞は1921年2月8日に政治の記事に「見得を切る日」とあるのが古い例である（聞蔵Ⅱビジュアルを使用）。

国語辞典では、『日本大辞典改修言泉』（1928）に「見得を切る」が掲載されているのが、今回調べた中での初出である<sup>注6</sup>。

このように、歌舞伎以外の小説や新聞などで「見得を切る」が使われるようになったのは大正以降であり、その頃に育った大正生まれの歌舞伎俳優の使うことばにも影響したものと考えられる。

次に、なぜ「する」ではなく「切る」が使われるようになったのかを考える。本稿では2つの考え方を示す。ひとつは「見得」の動作性が失われたことによる変化である。最初に述べたとおり、「見得」は動詞「見える」の連用形「見え」が名詞化した語である。歌舞



伎において見得は「きまり」「にらむ」「思い入れ」といった動きが合わさったものとされる(渡辺(2004)、p.33)。しかし、「見得」がどのような動きなのか理解されにくくなり、ただのポーズとして捉えられ、「する」という形式的な動詞よりも、動作を示す動詞(この場合は「切る」と結びつきやすくなったのではないだろうか。「切る」という動詞は歌舞伎の演技をいうことばとして伝統的に使われる。例えば、江戸時代の歌舞伎俳優の逸話を集めた『役者論語』(1776)には「小男成(なり)しに長き大小をさし、出端にきつと**表(オモテ)を切り**、扱ねりてあるく所大きに見え」と、「おもてを切る」が使われている。そのほか、「正面を切る」も使われている。『青岳夜話』(4代目沢村源之助・1937)に「鉄山としても、正面を切って、亡霊に左手で抜身を突付ける彼の形が大きく生きてくる」(p.248)とある。「切る」は「きっぱりと、ある方向を向き、動きをとめること」というような意味で使われている。この動きと「見得」の動きとが合致したのだろう。

もうひとつ考えられる理由は、視点の変化である。『日本国語大辞典第2版』(小学館)の「見得」の項目には、江戸時代の用例として「見得になる」が示されており、本稿で資料とした芸談にも「見得になる」(27例)が使われていた。

それを尾上が左の手で搦んで、二人がきっぱりと決まった**見得になる**のです。

(『女形の事』(1944)復刻版(1988、p.40))

「見得になる」は、演技の流れで見得の形に至るという意味で、「見得」の動きを俳優の立場で人に伝えるようにするものである。こうした俳優の立場で言うのは「見得をする」も同様である。

一方で、服部(1999)は、「見得を切る」について「見得」が「勢いがよく、瞬間的な行為で、見る者に輪郭のはっきりとし、さわやかなイメージを喚起する演技」であることから、「切る」にふさわしいと感じられたのではないかと述べている。また、渡辺(2004)も「見得がその瞬間の激しい力によって「する」よりも「切る」という語感が近く、感覚的に「切る」という方に実感がわくのだろうと述べている。この「ふさわしいと感じ」、「実感がわく」のは見ている観客である。

このように、それまで、演じる側の視点で「する」「なる」が使われていたものが、観客側の視点を取り入れられ「切る」も使われるようになったと考えられる。なお、この新しい視点を取り入れたのは、明治以降に新聞や演劇雑誌を通して活躍した「劇評家」だったのではないだろうか。このことは、前に取り上げたように、8代目三津五郎が述べた「見得を切る」についての指摘に「半可通の先生方が言い出した言葉」とあるのと合致する。

### 3.3 「見得を切る」が使われているのはどういう場面か

これまでに「見得をする」と「見得を切る」とで動作に違いがあるという言及がされたことはない。2とおりの言い方が行われている芸談もあり、その場合、意味に違いがないのかを検討する。「見得をする」と「見得を切る」の両方を使っている『松のみと里 琴松芸談』(7代目松本幸四郎・1937)、『中車芸話』(7代目市川中車・1943)を取り上げる。

まずは、『松のみと里 琴松芸談』である。

問答の中に「其身は不動明王の尊容」云々で**不動の見得をする**ので重複しますから、私は始めのは富樫に向かってやり、片一方のは団十郎の不動の見得は此様でしたと見

物の方へ向つて不動の立像の形をやって居ります。(p. 121)

間近く寄つて面相拝み・・・カ、カ、カ、カ、カ・・・奉れエー」と云つて**見得を切ります**。(p. 136)

いずれも「歌舞伎十八番」の演目（前者は「勸進帳」、後者は「助六」）での見得について述べている。どちらにも動きはあるものの、前者よりも後者のほうが、見得に至るまでに激しい動作やせりふがついている。

『中車芸話』は次の2例である。

道具が納ると、すぐに花道から定九郎が、バタ／＼で駈出して出て来て、付際で揚幕を振返つた**見得をします**。(p. 74)

七日目から立稽古に掛つたのですが、見上げるやうな大男が**見得を切る**形などは、実に絵にも描けない珍妙不可思議な図で、又十能のやうな手をした男が、女形のサハリをやる時などは、吹出さずにはゐられない位でしたが(略) (p. 79)

「見得をする」は、歌舞伎俳優による演技について語っており、「見得を切る」は農村歌舞伎を教えたときに、農民たちの大げさな演技について述べている場面である。後者は田舎芝居による見得であり、必要以上におおげさな動きであることを揶揄しているようにも見える。こうしたことから「切る」は「する」よりも、大きな動きを表現しようとして使われたとも考えられる。前に述べたように、「する」よりも「切る」のほうがきっぱりとした動きをあらわすように感じられるためである。

昭和以降、特に戦後になって、大正生まれの俳優が活躍するようになり、「見得を切る」が主な言い方として使われるようになったことで、「見得をする」との意味の違いもなくなったということだろう。

#### 4. まとめ

本稿では、幕末から大正に生まれた歌舞伎俳優が残した芸談を資料として「見得を切る」の使用を調べた。歌舞伎俳優は「見得をする」を中心に使っており、これが歌舞伎の伝統的な言い方であると言うことができる。しかし、「見得を切る」も大正生まれの歌舞伎俳優を中心に使われており、昭和（戦後）になって定着したことがわかった。「切る」が使われるようになった理由として、「見得」の動作性が失われた可能性と、見得の激しい動きを、観客側の視点で伝えるために、劇評家によって「切る」が選ばれたのではないかということ述べた。

さて、最後に、現代の歌舞伎俳優の使用についてひとこと触れておく。歌舞伎専門誌『演劇界』(2021)において10代目松本幸四郎(1973-)が「白塗りで着物を着て明るい舞台で見得をするものが、芝居だと思っていた」(p. 9)と、現代でも「見得をする」は使われている。

注1 本稿で資料にした芸談を俳優名（あるいは作者名）と生没年、資料タイトル、出版年、出版社を俳優の生まれ順に並べる。くわしくは、山下（2021b）参照。

3代目中村仲蔵（1809-1886）『口訳手前味噌』（1944・北光書房）、9代目市川団十郎（1838-1903）『団州百話』（1903・金港堂）、4代目尾上松助（1843-1928）『松助芸談』（1928・大森書房）、5代目尾上菊五郎（1844-1903）『尾上菊五郎自伝』（1903・時事新報社）、田村成義（1851-1920）『演芸逸史無線電話』（1918・玄文社）、11代目片岡仁左衛門（1858-1934）『万松軒昔話』（1936・中央公論社）、4代目沢村源之助（1859-1936）『青岳夜話』（1937・中央演劇社）、初代中村鴈治郎（1860-1935）『鴈治郎自伝』（1935・大阪毎日新聞）、7代目市川中車（1860-1936）『目黒談話』（1936・中央公論社）、『中車芸話』（1943・築地書店）、初代実川八百吾郎（1866-?）『実川八百吾郎芸談』（1961・高知新聞社）、5代目中村歌右衛門（1866-1940）『歌右衛門自伝』（1935・秋豊園出版部）、『魁玉一夕話』（1936・中央公論社）、『魁玉夜話 歌舞伎の型』（1950・文谷書房）、6代目尾上梅幸（1870-1934）『梅の下風』（1930・法木書店）、『扇舎閑話』（1936・中央公論社）、『女形の事』（1944・主婦之友社）、『尾上梅幸芸談』（1946・富山房）、7代目松本幸四郎（1870-1949）『松のみと里 琴松芸談』（1937・法木書店）、『一世一代』（1948・右文社）、『勸進帳の苦心（『随筆芝居』）』（1948・大河内書店）、初代喜多村緑郎（1871-1961）『わが芸談』（1952・和敬書店）、15代目市村羽左衛門（1874-1945）『欧米歌舞伎紀行』（1929・平凡社）、『可江夜話』（1936・中央公論社）、『市村羽左衛門対談』（1946・富山房）、初代尾上大五郎（1874-?）『楽屋ばしご』（1938・牧野五郎三郎）、3代目中村梅玉（1875-1948）『梅玉芸談』（1949・誠光社）、2代目実川延若（1877-1951）『延若芸話』（1946・誠光社）、5代目市川三升（1880-1956）『九世団十郎（ちち）を語る』（1950・推古書院）、2代目市川左団次（1880-1940）『父左団次を語る』（1936・三笠書房）、『左団次芸談』（1936・南光社）、6代目尾上菊五郎（1885-1949）『音羽屋百話』（1936・中央公論社）、『芸』（1947・改造社）、初代中村吉右衛門（1886-1954）『秀山弓譚』（1936・中央公論社）、『吉右衛門自伝』（1951・啓明社）、8代目市川団蔵（1882-1966）『七世市川団蔵』（1942・石原求竜堂）、7代目坂東三津五郎（1882-1961）『三津五郎芸談』（1949・和敬書店）、『三津五郎舞踊芸話』（1950・和敬書店）、3代目市川寿海（1886-1971）『寿の字海老』（1960・展望社）、初代市川猿翁（1888-1963）『猿翁芸談聞書』（1963・時事通信社）、久佐太郎（1891-1955）『自ら語る現代名優身の上話』（1928・博文館）、初代坂東調右衛門（1896-1982）『脇役一代』（1977・新日本出版社）、3代目市川左団次（1898-1969）『市川左団次芸談きき書』（1969・松竹）、2代目中村芝鶴（1900-1981）『大文字草』（1961・東京書房）、3代目中村翫右衛門（1901-1982）『人生の半分』（1959・筑摩書房）、2代目中村鴈治郎（1902-1983）『役者馬鹿』（1974・日本経済新聞）、13代目片岡仁左衛門（1903-1994）『嗟峨談話』（1976・三月書房）、8代目坂東三津五郎（1906-1975）『父三津五郎』（1963・演劇出版社）、『言わでもの事』（1970・文化出版局）、『歌舞伎 虚と実』（1973・玉川大学出版部）、5代目嵐芳三郎（1907-1977）『芳三郎芸話』（1981・新日本出版社）、5代目上村吉弥（1909-1992）『一方の花』（1993・遠島貞子）、11代目市川団十郎（1909-1965）『市川海老蔵』（1953・歌舞伎堂第一書店）、17代目中村勘三郎（1909-1988）『自伝やっぱり役者』（1976・文芸春秋）、2代目西川鯉三郎（1909-1983）『鯉三郎百話』（1977・中日新聞社）、2代目尾上松緑（1913-1989）『踊りの心』（1971・毎日新聞社）、『役者の子は役者』（1976・日本経済新聞社）、『松緑芸話』（1989・講談社）、7代目尾上梅幸（1915-1995）『梅と菊』（1979・日本経済新聞社）、17代目市村羽左衛門（1916-2001）『17代市村羽左衛門聞書』（1983・NHK出版）、6代目中村歌右衛門（1917-2001）『花と夢と』（1981・小学館）、3代目河原崎権十郎（1918-1998）『紫扇まくあいばなし』（1987・演劇出版社）、4代目中村雀右衛門（1920-2012）『女形無限』（1998・白水社）、『私事 死んだつもりで生き

ている』(2005・岩波書店)。

注2 江戸時代の芸談には、『役者論語』『古今役者論語魁』『市川栢蓑舎事録』『老のたのしみ』『月雪花寝物語』などがある。

注3 本稿で取り上げた芸談64冊のうち、52冊が聞き書き、12冊が自筆である。聞き書きが多く、芸談を資料として扱う場合には、芸談に書かれていることばが俳優自身のことばそのままではない可能性もあることを考慮に入れる必要がある。ただし、聞き書きであっても、いずれも歌舞伎の専門家である歌舞伎評論家や新聞記者がまとめたものであり、歌舞伎界のことばとしても問題はないと考え、本稿では聞き書きも自筆も同等に扱うことにした。

注4 戸板康二は『新版歌舞伎事典』(2011)においては、「動詞は「見得をする」」であると書いているが、1953年の段階では「見得を切る」を動詞として採用している。

注5 8代目坂東三津五郎については、山下(2021a)参照のこと。

注6 明治から戦前に発行された辞書のうち『漢英対照いろは辞典』(1888)、『言海』(1891)、『日本大辞書』(1893)、『日本大辞林』(1894)、『日本大辞典』(1896)、『ことばの泉 日本大辞典』(1898)、『辞林』(1907)、『広辞林第2版』(1926)、『日本大辞典改修言泉』(1928)、『大日本国語辞典』(1929)、『辞苑』(1935)、『大言海』(1935)、『言苑』(1938)を調べた。「見得を切る」は『日本大辞典改修言泉』『辞苑』『言苑』に掲載されていた。

## 参考文献

- 演劇界(2021)「話題の舞台 歌舞伎座「八月花形歌舞伎」松本幸四郎」『演劇界』79-9 pp. 8-11
- 小林祥次郎(2015)「見得」『遊びの語源と博物誌』(勉誠出版) pp. 123-124
- 服部幸雄(1999)「切って落とす」『歌舞伎ことば帖』(岩波新書) pp. 54-60
- 山下洋子(2021a)「歌舞伎俳優・八代目坂東三津五郎のことば」『立教大学日本文学』第126号 pp. 18-31
- 山下洋子(2021b)(予定)「歌舞伎俳優の芸談-近現代歌舞伎におけることばの変化を知る資料として-」『立教大学大学院日本文学論叢』第21号 pp. 172(1)-153(20)
- 渡辺保(2004)「見得」『歌舞伎のことば』(大修館書店) pp. 28-33

## 「夢酔独言」の待遇表現——勝小吉を中心に

### はじめに

「夢酔独言」は勝海舟の父、勝小吉が天保十四（一八四三）年に著した書物である。本書については、つとに中村通夫氏が「夢酔独言の語学的価値」（コトバ。昭和一六年十月。「東京語の性格」所収）において紹介され、「江戸で生まれた武家階級の日常会話に近い言葉で書かれた」文献として知られてきた。戸川氏所蔵と言われる、小吉自筆の原本は見えないが、そのコピーを山口豊氏の御厚意によって、借覧することができた。本日ここに「夢酔独言」を取り上げることができるのは、すべて山口氏の御厚意による。話を始める前=御礼申し上げる次第である。この書を活字化したものはいくつかあるが、入手しやすいものを二種挙げておく。

中公ハックス日本の名著 勝海舟 責任編集 江藤淳 中央公論社  
平凡社ライブラリー 夢酔独言他 勝小吉著 勝部真長編集 平凡社

「夢酔独言」の引用は自筆本によった。その所在は丁数と行数を算用数字で示した。なお、中央公論社版の頁数も漢数字によって併記した。

今回、「夢酔独言」を取り上げたのは、この書を通して勝小吉という一人の人間の待遇表現を描き出してみたいと思ったからである。ただし、今回は人の呼び方に限定して話を進める。

これまでの近世待遇表現の研究は語の待遇価値を段階的に記述する研究やその語の語誌を追う究が多かった。このことは、近世に限らず待遇表現研究全体についても言えるのではないかと思われる。

待遇表現をその待遇価値に従って段階的に記述することは、既にロドリゲスの「大文典」に見える。

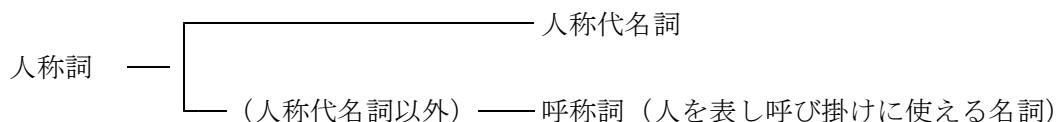
○かくして、第一位に **Sama** があり、第二位に **Cô**(公)、第三位に **Dono** (殿)、第四位に軽い敬意を払ふ僧侶や剃髪者に対して使ふ **Rô**(老)があることになる。(ロドリゲス 日本大文典。土井忠生訳。574 頁)

このような段階的記述を近世前期の上方語において大規模に行った研究として、山崎久之氏の「国語待遇表現体系の研究」(武蔵野書院。昭和三八年刊)がある。

待遇表現研究のもう一つの方向として、個々の待遇表現の語誌的研究がある。たとえば、辻村敏樹氏の「『貴様』の変遷」「『お…になる』考」(いずれも「敬語の史的研究」<東京堂出版一九六八年刊>所収)のようなものである。

これまでの近世待遇表現の研究では、このような段階的記述や語誌的記述が主であって、一人の人間の待遇表現を全体的に捉えようというような試みはなかったように思われる。少なくとも、寡聞にして私は知らない。仮に一人の個人、又は武士や町人といった人物類型の待遇表現を全体的に記述する研究を待遇表現の類型的研究と呼ぶことにしよう。このような類型的研究においては、一人の人物がどのような待遇表現を使用し、一方どのような待遇表現によって待遇されたかを明らかにし、その人物をめぐる待遇表現の類型を構築することになる。

本題に入る前に本稿で使う用語について説明する。本稿では呼び掛けに使える言葉の整理のために、呼称詞と人称詞という用語を使う。もちろんこれらは文法上の術語のような厳密なものではなく、あくまでも整理の便宜のためのものである。呼称詞というのは、「お父さん」「お母さん」のようなもので、人を指し表すだけでなく、呼び掛けにも使用できるものである。人を指し表す言葉には人称代名詞もあるので、人称代名詞と呼称詞を一括したものとして人称詞を立てる。



本稿では、勝小吉という一人の武士を中心に据えて、小吉がどのように自称し、どのように聞き手を言語化したか、また小吉が他人からどう呼ばれたかを明らかにしていきたいと思う。本目扱えるのは呼び方や呼ばれ方などであって、人称代名詞や呼称詞を扱うことになる。動作、状態に関する待遇表現は他日に譲る。

### 一 小吉の自称——小吉は自分のことをどう称していたか

「夢酔独言」で小吉は、自称として次のような人称詞を用いていた。

上位者に対して——「私」 同位者——オレ

下位者に対して——オレ、此ノ方、自分、ワシ、隠居、御旗本様、夢酔

このほかコッチが自称として使われているが、これは地の文だけである。オラ、テマエ、、ワレワレのような一人称代名詞も出てくるが、小吉は使用していない。なお、武士の自称として有名な「拙者」は、「夢酔独言」には見られない。ただし、「平子龍先生遺事」には「拙者は何も是と申す事はなく候へども」（平凡社ライブラリー「夢酔独言他」一六六頁）などと使用されている。

以上のような小吉の自称を「春色梅児誉美」の藤兵衛の自称と比較してみよう。「春色梅児誉美」における藤兵衛の自称は次のようものである。

オイラ オラ オレ コッチ ワタクシ ワタシ 藤兵衛 藤サン

両者の相違の一つとして、藤兵衛がオイラ、オラを使用しているのに、小吉は使っていない。一方、藤兵衛には此ノ方、自分、ワシが欠けている。小吉使用の自称の中から、注意すべきものを取り上げてみよう。

<私> 「夢酔独言」中の「私」には振り仮名がないので、なんと読むか決定できない。江戸語の「私」には、ワタクシ、ワタシ、ワッチ、ワチキ、ワタイなどの読み方があるが、「夢酔独言」の「私」の読み方として有力なのはワタクシとワタシだろう。「夢酔独言」には仮名書きの「わたし」が四例あるが、仮名書きの「わたくし」は一例もない。そこで、「夢酔独言」ではワタクシを「わたし」と仮名書きし、ワタクシを「私」と漢字で書いたのではないかと、という考え方が出てくる。現に「夢酔独言」の「私」の中には高い待遇環境において使用されたものがある。

●一同に答へもなく平伏して幾重にも此段は私共が心得違へ何卒御慈悲に御免し被下とて涙を出して詫るから 99ノ17（四二三頁下段）願塚の村人→小吉

この例ではワタクシと読むよりワタクシと読んだ方が、その待遇状況にふさわしい。このよ

うな例が「夢酔独言」には多いが、しかし、次のような場合もある。即ち、男谷精一郎は小吉に対してワタシと言ったり、「私」と言ったりしている。

●おまへの迎に外の者をやつたら切りちらして帰るまいと相談のうへわたしがきたから是非とも江戸へ一度帰りでの上どふともなされ 50ノ18 (三九一頁上段)

●必ずおまへには食を断て死ぬだろふと私もおもつた故様々親父が機嫌を見合て留たが聞入ぬ故かふなつた 79ノ13 (四一〇頁上段) 男谷精一郎→小吉

精一郎と小吉の関係は甥と叔父の関係になるが、年齢は一七九八年生まれの精一郎の方が年長である。養子に入る前から遊び仲間で、喧嘩をして廻ったり、道場荒らしをしたりしている。このような点を考慮すると、精一郎→小吉の「私」はワタシと読んだ方がよいように思われる。

<御旗本様>小吉は自分のことを旗本だと思い、他人にもそう言わせかけたようである。次に引用する例は、「御旗本様」と書いた書き付けを出させようとしているところである。

●そんなら以来は御旗本様へ対し慮外致すまいといふ書付をいませ 56ノ6 (三九四下段) 小吉

既に記したように勝家は御家人であって、旗本ではない。それなのに小吉は自らを「旗本」だと思い、「おれは生れながらの御旗本で身分も尊し」(三九八頁上段)と称し、「御旗本へ対して不礼」(三九五頁上段)とも言っている。御家人が旗本と自称するのは僭称のようであるが、当時としてはそう

ではなかったようである。小吉ばかりでなく、小吉の供の者も小吉を「御旗本は違った物だ」(四二一頁下段)のようにと言った例がある。

## 二 小吉の対称——小吉は聞き手をどのように呼んだか

小吉が「夢酔独言」において使用した聞き手を表す人称詞には、次のようなものがある。オノシ、オマエ・オマイ、貴公、貴様、サン、足下、其ノ方(共)、手前、ワレ、皆様、皆サン、呼び捨テ

これを藤兵衛の使用対称と比較してみよう。藤兵衛の使用対称は、次のようである。

アナタ、ウヌ、オッカア、オッカサン、オバサン、オメエ、貴様、～公、～サン、～字、ソッチ、チャン、テメエ、～坊、呼び捨テ

藤兵衛が使用し小吉が使用していない対称にはいろいろあるが、その中で武家と町人の相違にかかわるものは、オメエ、テメエのような音訛による対称の有無である。既に中村通夫氏や山口豊氏が指摘されているように、「夢酔独言」には接続母音の長音化(連母音の音訛)が少ない。両氏によってアイ、ウイの長音化は指摘されているが、「夢酔独言」には、オイの長音化も見られる。ついでに挙げておくことにする。

●ふていやつだ 22ノ13 (三七二頁上) 馬引→少年小吉

ただし、この例の話し手は小吉や武家ではなく、駿府の馬引である。

このように武家社会では連母音の音訛が少なかったため、オマエ→オメエ、テマエ→テメエという変化が起きにくく、独自の待遇価値を持つオメエ、テメエという二人称代名詞を作ることはなかった。

小吉はオメエ、テメエを使用しないかわりに、下位者に対してテマエ、其ノ方(共) 貴

様、オノシ、足下、ワレを使用している。

### 三 小吉はどのように呼ばれていたか——小吉に対する呼称

ここでは、主として二人称の人称詞（二人称代名詞と二人称呼称詞）を扱う予定である。

#### 1. 町人や村人など非武家の人は小吉をどう呼んだか

「夢酔独言」の中で、小吉は町人、村人など非武家の人々から次のように呼ばれている（中には他称として用いられたものも含む。少年時代は除外）。

アナタ、アナタ様、オマエサマ、オマエサン、御前、御前サマ、御旗本様・御旗本、御役人様、殿様、勝サマ、夢酔様、旦那、御手前、御自分、先生、呼び捨て

これらは、どれも敬意の高い人称詞である。

- あなたは大変だ 112ノ9（四三一頁下段）易者→小吉
  - 仕立屋やがいふには夫はあなた様はごむりだ。神事には法といふ物が有りますとていろ／＼ぬかす故（三九八上段）小吉→仕立屋
  - 夫れから関所をこしてやすんでいたら跡~~メ~~きた商人がいゝおるには今私が御関を通りましたがおまへさまの噂をしてござつたが、今通つた侍は飛脚でもないがはん中でもなしなんだろふとて噂をしていましたといふから其筈だはおれは殿様だからといつてやつた。46ノ22（三八八頁下段）小吉←→商人
  - おまへさん方はけがが有つてはわるいから、是非／＼早くにげろ35ノ19（三八一頁下段）源兵衛→小吉
  - 私共が二三年諸方へ頼て奥様の事を骨を折たが岡野と聞くと皆々破談になりましたが御前の御蔭で殿様始一同安心して悦ます。68ノ15（夢酔独言四〇三頁上段）岡野知行地の百姓→小吉
  - 私どもの身分の義御免の上は御前さまの義は身分に応し候事はお請を仕る 99ノ22（夢酔独言四二三下段）村人→小吉
  - 道具の市にてはもおけの半分は諸道具屋へそばまた酒を買て喰た故殿様／＼といゝおつて70の10（四〇四頁下段）道具屋→小吉
  - そんなら以来は御旗本様へ対し慮外致すまいといふ書付をいませ 56ノ6（三九四頁下）小吉→大頭伊兵衛ら
  - 御旗本は違た物た 96ノ18（四二一頁下段）
  - 御役人様御見のがし被下ませ 40ノ11（三八四頁上段）音吉（博奕打ち）→小吉
  - 勝様が仰では有が中／＼よふみには寄加持は出来ぬ 61ノ7（三九八頁上段）仕立屋
  - 夢酔様は御奉行様と御懇意だ 95ノ4（四二〇頁下段）村人
  - 夢酔様は奇妙の御方だ雨の降るを昨日から知ていさしやる 96ノ17（四二一頁）村人
  - 旦那は水戸の御使で中村さまへいかしやる 49ノ4（三九〇頁上段）駕籠屋→宿の人
- このような小吉の呼ばれ方を藤兵衛の呼ばれ方と比べてみよう。藤兵衛は「春色梅児誉美」の中で、次のようによばれている。

アナタ、アナタサマ、オマエサン、オマハン、オメエサン、貴殿、其ノ方、旦那、藤サン、藤兵衛、藤兵衛サン、



藤兵衛は武士ではないから、御旗本、御旗本様、御役人様、殿様と呼ばれることはない。小吉は「勝さま」（四三一頁上段。南平→小吉）のように～サマ付けで呼ばれることがあるが、藤兵衛は「藤兵衛さん」「藤さん」とサン付けで呼ばれている。

<殿様>「夢酔独言」の中で、小吉は非武家から「殿様」と呼ばれている（四〇四頁下段）。また、小吉自身自ら「殿様」と称したこともある（三八九頁上段）。このように小吉は自ら「殿様」と称したり、町人からも「殿様」と呼ばれたりしていたが、「殿様」について、「あすか川」（柴村盛方。文化七年）は次のように記す。

○昔我等ごとき御目見得以上は、旦那様御新造様と申す。いつとなく殿様奥様といふやうなり。（日本随筆大成第二期<新版>十。六頁）

この記述によれば、昔は御目見得以上の旗本であっても旦那様と呼ばれ、殿様とは呼ばれなかった。それがいつの間にか殿様と呼ばれるようになったというのである。勝家のような御目見得以下の場合、昔（ここでいう昔はいつのことか触れられていないが、仮に盛方が十八歳で家を嗣いだ元文四（1739）年頃とすると）その頃は御家人を「殿様」ということはなかったことになる。しかし、「あすか川」にもあるように、「殿様」の範囲は下の方へ広がっていった。一方、「守貞漫稿」には次のような記述がある。

○万石以下以上トモニ幕府直参ノ武士ハ臣僚ヨリ主人ヲ称シテ殿様ト云（鉢崎守貞漫稿・人事五五頁下段）

これによれば、幕府の直参は「殿様」と言うことになる。「殿様」の価値が下がってきている訳で、これから見ると小吉が「殿様」と呼ばれたり、自ら「殿様」と称したりしても、あながち僭称とは言えない。

<御前・御前サマ>以上挙げた人称詞のうち、「御前」「御前さま」の「御前」には、振り仮名がないので、オマエと読むか、ゴゼンと読むか、読み方がきまらない。

夢酔独言には「おまえ」と仮名書きされた二人称代名詞が一八例出てくる。これにならって「御前」をオマエと読むという読み方が、まず考えられる。オマエは、「夢酔独言」に限らず、江戸語の二人称代名詞として使用量の多い代名詞であるから、「御前」をオマエと読むのは、この点から見ても無理がない。一方、「御前」をゴゼンと音読するのは、ゴゼンという二人称代名詞が江戸語では余り使われなかったもので、かなり特殊な読み方になる。江戸の小説類、たとえば「浮世風呂」や「浮世床」には、ゴゼンという二人称は使われていない。しかし幕末の英学資料の中には、二人称のゴゼンに言及したものがある。会話編 II NOTES の EXERCISE VI に次のように記されている。「To a daimio or hatamoto by his retainers ,also ,gozen」（東洋文庫復刻版四八頁）。これによれば旗本はゴゼンと呼ばれることがあったことになる。小吉も旗本のはしくれであるから、ゴゼンと呼ばれた可能性がある。とすれば、小吉を指す「御前」はゴゼンと読むべきではないか、とも考えられる。待遇表現として見ると、「夢酔独言」のオマエにも上位者に対する使用例はあるが、話し手と聞き手間の待遇格差はそれほど大きくない。既出してある「御前」は村人→小吉の間で用いられており、その待遇格差は大きい。この「御前」をオマエと読むと、両者間の待遇格差にそぐわない。もう一例の「御前」は村の代官→小吉の関係で使用されているが、この代官は岡野孫一郎の知行地を管理する村人で、その他の村民と身分的には大差ないものようである。やはり、これをオマエと読むと、小吉に対して礼を失することになる。以上のように、待遇表現としてみると、「夢酔独言」の「御前」はオマエとは読みにくく、むしろゴゼンと読むべきではないか、と思われる。

「御前」については以上のように考えられるが、御前サマの場合はオマエサマかゴゼンサマか判定がつかない。

## 2. 小吉は身内の人からどう呼ばれたか

### 目上の身内→小吉の場合

「夢酔独言」において、小吉が目上の身内からどう呼ばれていたかを次に示す。括弧内に記したのは、その使用者である。

オノレ（平蔵、祖母）、オノシ（平蔵、大兄）、オヌシ（大兄）、手前（大兄）、貴様（松坂三郎右衛門）、オマエ（兄嫁）、左衛門太郎殿（兄嫁）

小吉の祖母、父、兄たちは下位者に対して用いられるオノレ、オノシ、オヌシ、手前、貴様を用いて小吉を遇しているが、兄嫁はやや待遇価値の高いオマエや〜ドノ（殿）を使って小吉を呼んでいる。

## 四 身分による待遇表現の格差

身分社会の江戸では、その上下に基づく待遇表現の格差が歴然と現れている。これについて、武家対非武家（町民と村人）、身内内の格差と二つに分けて記していく。

### 1. 武家対非武家の待遇格差

「夢酔独言」の中で、小吉が町民や村人からどのように呼ばれ、一方小吉が彼らをどのように呼んでいたか、以下それを見ていくことにする。

小吉は、以下に示すように町人や村人から高い待遇表現を以て待遇されている。

オマエサマの例は既出したので再掲はしないが、箱根の関所を越えてきた小吉に向かって、後から来た商人が小吉に対してオマエサマを使用している。二人は見ず知らずの間柄であるにもかかわらず、商人は小吉に対してこのような高い敬語を使用している。この例文の中には「私」も出てくるが、これには振り仮名がない。オマエサマとの釣り合いから考えれば、ワタクシではないかと思われる。これに対して、小吉はオレを使用し、マスを使わないなど、普通待遇表現で応じている。見ず知らずの間柄であっても、武家対町人の間にはこのような大きな待遇格差が存在していた。

次に挙げる例は、やはり武家対非武家（町人）の会話であるが、この例ではお互いに何者であるかは承知している。真言の行者殿村南平が巫女に富籤の当たり番号を言わせるところ、小吉が「是は随分出来る事だろう」と言ったので、かげ富の箱見をする仕立屋が反対して、次のように言う。

●仕立屋やがいふには夫はあなた様はごむりだ。神事には法といふ物が有りますとていろ / \ぬかす故おれが座敷の真中へ出でまづ論は無益だから手前は自分の前へ出て礼をしろゆるすといわぬ内に手前が頭が上つたらおれは直に手前の飯たきになるふからさあこひといつたら 61ノ13（三九八上段）仕立屋←→小吉

仕立屋は小吉をアナタ様やマスを用いて待遇しているのに対して、小吉はオレと自称し、下位者に用いるテマエで相手を指している。ここにも大きな待遇格差が現れている。

小吉は天保十（1839）年、三八歳頃、岡野孫一郎の知行地、大坂の願塚村に出向き、領

主のため金策をする。しかし村人は金策に応ぜず、竹槍などで威嚇する。小吉は村人たちに次のように言う。

●此の度其方共の地頭が余義なき頼故に病身を凌て上坂して其方共へ何分頼むといふ一言を今迄の用人同様心得取合ず此段不敬千万 99 ノ 10 (四二三頁下段) 小吉→村人  
小吉は村人たちをソノホウドモと呼んでいるが、ソノホウは武士が下位者に対して使う二人称で、「浮世風呂」や「浮世床」には出てこないものである。ドモも敬意を含まぬ接尾語であって、「不敬千万」などと相まって下位者に対する物言いになっている。一方、村人は恐れ入って、許しを乞う。

●幾重にも此段は私共が心得違へ何卒御慈悲に御免し被下 99 ノ 17 (四二三頁下段)  
村民は「私共」、オ～ナサレなどの敬語を使用してひたすら下手に出る。小吉は村民の詫びを入れて、次のように言う。

●夫ほどまでいふ故に愚昧の百姓共故差免し可申 99 ノ 19 (四二三頁下段)  
今の感覚で言えば、随分見下した言い方であるが、小吉は村民に対してこのように接している。

武士の尊大な言葉遣いは、サトーの「会話篇」にも見られる。

○ Oi, kono maidama wa ikura da. (EXERCISE XVI 21) 東洋文庫本七二頁  
この話し手は Tokugawa regime のサムライ、聞き手は繭玉売りの商人である。オイという呼び掛けは下位者に対するもので、マスは使用されていない。今日の見方をすると、随分横柄な態度で買い物をしているように見える。これに対して、商人は

○ Ichi riô de gozaimasu. (EXERCISE XVI 21) 東洋文庫本七二頁  
と丁寧に答えている。

○ Oi, teishi, oku-zashiki no kirei na tokoro wo danna no o ima ni suru yô ni. Sô shite banjiso-riaku ga atte wa sumanu zo (EXERCISE XVII 23) 東洋文庫本七八頁  
この話し手は medium rank の役人の家来で聞き手は宿駅の宿の亭主である。話し手の身分は武士とは言っても甚だ低い。それにもかかわらず、宿屋の亭主の応対は次のようである。

○ Hei, hei, kanai no mono ni mina yoku iitsukete wa okimashita keredomo, iki-todokimasen' tokoro wa o sashidzu wo yoroshiku dôzo. (EXERCISE XVII 24) 東洋文庫本七八頁  
武士は街道の宿駅を通るときも、大威張りで通過する。

○ koré, Shiku-yakunin, sakujitsu no sakiburé no tôri ninsoku nokorazu sorotte iru ka é. On sadame dôri chinsen wo harau kara kono dachin-cho e kaki-tomete kurero (EXERCISE XVII 12) 東洋文庫本 74 頁。喜三郎→宿役人

○ Do sita mon' da! Sakuya are hodo danjite oita ni, komaru ja nai ka (EXERCISE XVII 39) 東洋文庫本 80 頁。喜三郎→宿役人  
次に按摩との遣り取りを見てみよう。

○ Oi, amma, ikura da ○ Ni hiaku mon kudasai ○ Sori ya takei. Sukosi bakari mondé ; dô da hiaku gojiu ni makero (EXERCISE XIX 21) 東洋文庫本 94 頁。喜三郎→按摩  
「会話篇」を参照すると、武士が町人や村人に対して尊大な態度を示すのは、小吉ばかりではなかったようである。

## 2. 武家身内における待遇格差

「夢酔独言」では、身内における上下関係が待遇表現に反映している。

@男谷平蔵（小吉の実父）→その息子たち

平蔵は自分の息子と話すとき、敬語は使用せず、敬意のない対称を使用する。

●年もゆかぬにばゝさまにむかつておのれのよふな過言をいふやつはないしじうか見届けない 13ノ1（三六六上段）男谷平蔵→小吉

●手前も年のわかぬうちは度々そんなことが有つたけはつかの金で小吉をきづものにはできぬ故なにか了簡してみやれ 33ノ22（三八〇頁上段）男谷平蔵→男谷彦四郎  
小吉の祖母も小吉に対して次のように言う。

●おのれは勝の家をつぶそうとしたな 33ノ7（三七九下段）勝家の祖母→小吉  
兄弟間の会話でも長幼の別があり、敬語は使用されていない。

●手前が手段で勤道具衣服も出来るなら勝手にしろおれはいかひこと手前にはいり上たゆへ今度は構ぬ（三九二頁上段）52ノ1大兄男谷彦四郎→小吉

●手前が手段で勤道具衣服も出来るなら勝手にしろおれはいかひこと手前にはいり上たゆへ今度は構ぬ（三九二頁上段）52ノ1男谷彦四郎→小吉

以上、小吉は祖母、父、兄からオノレ、手前、オヌシ、オノシ、キサマのような対称詞で指示されており、敬語は用いられていない。

兄嫁と小吉でも、兄嫁上位という格差が出ている。兄嫁→小吉では、親兄弟とは違って、小吉に対する軽い敬語が現れる。

●左衛門太郎殿、おまへはなぜにそんなに心得違斗りしなさるお兄様が此間から世間容子を不残聞合てござつたが、捨置けぬとて心配して今度庭へおりを拵ておまへを入るといゝなさるからいろ／＼みんなが留たが少も聞かずしてきのふ出来上たからは晩に呼にやつておし籠ると相談が極たが精一郎も留たが中／＼聞入がなぬからわたしも困っている 78の10（四〇九頁下段）兄嫁→小吉

ここには小吉に対する軽い敬語のワタシ、オマエ、ナサルなどが使われている。なお、～ドノの待遇価値は、江戸語ではサマより低かったようであるが、軽い敬語であるかどうかは保留する。

目下の身内→小吉

男谷精一郎→小吉で使用された、オマエがある。

友達→小吉

友達→小吉の関係で用いられている人称詞には、オマエと先生がある。

○大頭伊兵衛、橋本庄衛門、最上幾五郎という友達が尤もだが折角出来たのに おまえがことわると皆々断る故兵庫も今更後悔してあやまるからゆるしてやれと種々いうから（三九四頁下段）大頭伊兵衛ら→小吉

○先生は今迄人の事はいろいろ助けてやつた故今度は岡野の諸親類又は頭迄が掛りて出来ず明日表向きになるという大変のさうどうを捨てて見ては是れ迄の義々はみないたずらになるから此の一件も押付けてやるがいい（四一七頁上段）島田虎之助→小吉

[座談会]

## 「語彙・辞書研究会の30年」

沖森卓也（立教大学名誉教授／語彙・辞書研究会 代表）

林 史典（筑波大学名誉教授／語彙・辞書研究会 前代表）

萩原好夫（元株式会社三省堂／語彙・辞書研究会 元事務局）

〈司会〉

木村義之（慶應義塾大学）

〈資料〉第1回～第59回研究発表会 記録

【第1回】研究発表会

日時：1992年6月27日（土）14:00～16:45

会場：三省堂文化会館 1階 大ホール

【研究発表】

梶井恵子

「古語辞典における意味記述」

中道真木男

「日本語教育のための学習辞典をめぐって」

安田尚道

『言海』に紛れこんだ東北方言」

【第2回】研究発表会

日時：1992年11月28日（土）14:00～16:45

会場：三省堂文化会館 8階 大研修室

【研究発表】

陳 力衛

「和製漢語とその出典例との関係」

山田 潔

「古典語における複合辞「つらむ」の用法について」

遠藤織枝

「「女性語」の枠組みを考える」

【第3回】研究発表会

日時：1993年6月26日（土）13:30～17:45

会場：三省堂文化会館 8階 大研修室

【研究発表】

宋 永彬

「日韓教科書漢語の対照研究」

曹 喜澈

「韓国における「国語醇化」と日本語」

中山緑朗

「国語辞典未採録語彙の問題」

R.フシチャ

「タイプを異にする言語の辞書編集をめぐって」

萩野綱男

「辞書の意味記述のありかた」

【第4回】研究発表会

日時：1993年11月27日（土）13:30～

会場：三省堂文化会館 8階 大研修室

【研究発表】

影浦 峽

「複合専門用語の語形成傾向」

笹原宏之

「漢和辞典の国字に関する諸問題」

【シンポジウム】

『国語辞典に求められるもの』

野村雅昭

「辞書にのせる語、のせない語」

萩原好夫

「読者カードに見る、読者が求める国語辞典」

増井 元

「辞書担当者が目指す辞典とそれを実現する上での諸問題（制約）」

山田 進

「意味・用法の記述」

【第5回】研究発表会

日時：1994年7月2日（土）13:30～

会場：三省堂文化会館 2階 第2研修室

【研究発表】

山下喜代

「接辞と造語成分」

福田 求・影浦 峽

「専門用語辞書の『をも見よ』参照に関する考察」

阿久沢 忠

「“成長する”を意味する類義語「生ひ出づ」と「生ひ立つ」について」

【第6回】研究発表会

日時：1994年11月26日（土）13:30～

会場：三省堂文化会館 2階 第1研修室

【研究発表】

木村義之（早稲田大学大学院）

『世話支那草』と『齊東俗談』

沖森卓也（立教大学）

「国語辞典を引くのはどのような時か」

【特別講演】

国広哲弥先生（神奈川大学教授）

「理想の語義記述法私案」

〈資料〉第1回～第59回研究発表会 記録

【第7回】研究発表会

日時：1995年7月1日（土）13:30～

会場：三省堂文化会館 2階 第1研修室

【研究発表】

横井忠夫

「現代日本語における動詞の活用—いわゆる

「言葉の乱れ」の一断面—」

川村三喜男

「英語の基本的な位相的前置詞と日本語にお

けるその対応表現」

山口 豊

『和英語林集成』第三版における三字漢語の

構造—現代語調査との比較を通して—」

【第8回】研究発表会

日時：1995年11月25日（土）13:30～

会場：三省堂文化会館 2階 第1研修室

【研究発表】

中尾比早子

「恋愛情趣に用いられる「一心」の表現」

當山日出夫

「JIS漢字と辞書」

【シンポジウム】

『漢字・辞書』

島村直己

「常用漢字表時代の漢字教育」

鳥飼浩二

「異体字、特に漢和辞典における旧字の認定

について」

松岡榮志

「アジアの中の漢字」

【第9回】研究発表会

日時：1996年6月29日（土）13:30～

会場：三省堂文化会館 2階 第1研修室

【研究発表】

安岡孝一・安岡素子

「コンピュータ異体字の製作」

辻 慶太

「同義語の優先的使用状況と拍数・語種との

関わり」

潘 鈞

「中日同形語における品詞相違に関する一考察」

飯間浩明

「掛かる先の名詞に注目した「源氏物語」の

形容詞の分類」

【第10回】研究発表会

日時：1996年11月30日（土）13:00～

会場：三省堂文化会館 2階 第1研修室

【研究発表】

宮田公治

「組織・集団をあらわす名詞の用法」

鯨沢千鶴

「『羅葡日対訳辞書』の日本語」

中道知子

「『悩マシイ』の意味・用法について」

【シンポジウム】

『〈大型国語辞典〉への期待』

武藤康史（文芸評論家）

山口仲美（実践女子大学）

長嶋善郎（学習院大学）

【第11回】研究発表会

日時：1997年6月28日（土）13:00～

会場：三省堂文化会館 2階 第1研修室

【研究発表】

劉 懿珍

「日本語の形容詞と接頭語との関係について」

張 正來

「小型国語辞典における副詞認定の実態」

當山日出夫

「新JIS漢字体の属性認定」

山中信彦

「まじめ考」

城生佰太郎

「脳波実験による兄弟語彙の認知」

【第12回】研究発表会

日時：1997年11月29日（土）13:00～

会場：三省堂文化会館 2階 第1研修室

【研究発表】

石井正彦

「阪倉篤義氏の「語構成論」から学ぶべきもの」

岡本哲也

「語彙関数(LexicalFunction)と辞書の記述」

【講演】『語源探索の魅力』

前田富祺先生

「言語文化史における日本語語源研究」

寺澤芳雄先生

「英語の語源をさかのぼる—語源と言語文化—」

【第13回】研究発表会

日時：1998年6月27日（土）13:30～

会場：三省堂文化会館 2階 第1研修室

【研究発表】

奇 貞日文（東京大学大学院生）

「『捷解新語』の漢語の語構成について」

田村夏紀（鈴峰女子短期大学）

「図書寮本『類聚名義抄』と観智院本『類聚名義抄』の漢字字体の記載の比較」

荻野綱男（東京都立大学）

「用例はいくつ調べればいいのか」

伊藤雅光（国立国語研究所）

「色彩語の「出現順序」と色彩語彙の「量的特徴」との関係」

【第14回】研究発表会

日時：1998年12月5日（土）13:00～

会場：三省堂文化会館 2階 第1研修室

【研究発表】

中野 陽（東京大学大学院生）

「接尾辞による形容詞の転成と意味について」

飯島 満（国立国語研究所辞典編集室）・

大塚みさ（実践女子短期大学）

「近代活字文献の電子テキスト化における字形の整理」

【シンポジウム】

『外国人から見た国語辞典』

顧 明耀（西安交通大学）

シュテファン・カイザー（筑波大学）

チョ・ヒチョル（日韓辞典編者）

堀江・プリアー（東京学芸大学）

【第15回】研究発表会

日時：1999年6月26日（土）13:30～17:00

会場：三省堂文化会館 2階 第1研修室

【研究発表】

川村三喜男（東洋大学）

「「中間色」をあらわす語からみた日本語の色彩語彙の構造」

高橋光子（東京大学大学院）

「比喻による抽象的な意味分野の概念化について」

孫 琦（早稲田大学大学院）

「現代日本語形容詞の連用修飾法」

村田賢一（帝京平成大学ほか）

「国語表現教育のための辞書について」

【第16回】研究発表会

日時：1999年11月27日（土）13:30～17:30

会場：三省堂文化会館 2階 第1研修室

【研究発表】

木村 一（東洋大学）

「『和英語林集成』英和の部の削除された見出し語」

梶井恵子（立教大学）

「国語辞典における補助動詞の記述」

山下喜代（青山学院大学）

「字音接尾辞の引用機能と連体修飾構造」

【講演】

柴田 武先生

「日本語を日本語で分類する」

【第17回】研究発表会

日時：2000年7月1日（土）13:30～17:30

会場：三省堂文化会館 2階 第1研修室

【シンポジウム】

『辞書と文法』

青山文啓（桜美林大）

「ことばの研究と辞書情報」

近藤泰弘（青山学院大学）

「文法研究の立場から見た国語辞典」

砂川有里子（筑波大学）

「日本語学習者のための辞書と文法」

宮井捷二（創価大学）

「学習英英・英和辞書における文法・語法の記述」

【第18回】研究発表会

日時：2000年11月25日（土）13:30～17:00

会場：三省堂文化会館 2階 第1研修室

【研究発表】

鈴木功真（日本大学大学院）

「慶長15年版倭玉篇と黒川本類字韻・夢梅本倭玉篇との関係について」

葛 駿鋒（明德義塾）

「漢字系日本語学習者のための辞書と同形語」

加藤安彦（国立国語研究所）

「新しい日本語辞書の試み」

伊藤雅光（国立国語研究所）

「計量語彙論のための言語単位特徴表の提案」



〈資料〉第1回～第59回研究発表会 記録

【第19回】研究発表会

日時：2001年6月30日（土）14:00～17:00

会場：三省堂文化会館 2階 第1研修室

【研究発表】

横井忠夫

「カタカナ語と日本人の語学力」

山崎 誠（国立国語研究所）

「現代雑誌言語調査の外来語」

伊藤雅光（国立国語研究所）

「ポップス系流行歌における語種と言語種の  
認定問題について」

【第20回】研究発表会

日時：2001年11月17日（土）14:00～17:00

会場：三省堂文化会館 2階 第1研修室

【シンポジウム】

『特殊辞典の現状と課題』

秋永一枝（元早稲田大学）

「多数計アクセントへの類推変化」

遠藤織枝（文教大学）

「女性のことばと辞書」

砂川有里子（筑波大学）

「日本語学習者のための表現辞典」

山口仲美（埼玉大）

「擬音語・擬態語辞典」

【第21回】研究発表会

日時：2002年6月29日（土）13:30～17:00

会場：三省堂文化会館 2階 第5研修室

【研究発表】

李 宗和（大正大学大学院）

「ドウモの用法に関する語用論的考察」

宮田和子（東亜学院）

「英華辞典から英和辞典へ」

木村義之（十文字学園女子大学）

「隠語辞典の性格と資料性」

金子 彰（東京女子大学）

「一仏教者の語彙と表記について」

伊藤雅光（国立国語研究所）

「絶対語彙論と相対語彙論」

【第22回】研究発表会

日時：2002年11月30日（土）13:30～17:00

会場：三省堂文化会館 2階 第5研修室

【研究発表】

田貝和子（東洋大学大学院）

「樋口一葉の小説作品における時の助動詞に  
ついて」

鈴木智映子（学習院大学大学院）

「作文資料に見られる敬意表現の変遷」

中山緑朗（作新学院大学）

「古往来語彙と記録語彙の関連について」

【講演】

石綿敏雄先生

「外来語と外国語」

【第23回】研究発表会

日時：2003年6月28日（土）13:00～17:00

会場：三省堂文化会館 2階 第2研修室

【シンポジウム】

『類義語をめぐる諸問題』

山田 進（聖心女子大学）

「類義語の記述と辞書」

加藤安彦（専修大学）

「コーパスから見た類義語」

広瀬正宜（国際基督教大学）

「日本語教育から見た類義語」

長嶋善郎（学習院大学）

「外国語の辞書での類義語の扱い」

【第24回】研究発表会

日時：2003年11月29日（土）13:00～17:00

会場：三省堂文化会館 2階 第2研修室

【シンポジウム】

『カタカナ語をめぐる諸問題』

荻野綱男（東京都立大学）

「企画の趣旨」

塩田雄大（NHK放送文化研究所）

「放送におけるカタカナ語の扱い」

関根健一（読売新聞東京本社）

「新聞におけるカタカナ語の扱い」

小野正弘（明治大学）

「カタカナ語と語の伝達性」

〈資料〉第1回～第59回研究発表会 記録

【第25回】研究発表会

日時：2004年6月26日（土）13:15～17:00

会場：三省堂文化会館 2階 第2研修室

【研究発表】

中村亜由（立教大学大学院）

「国語辞典から見た二字漢語サ変動詞の自他について」

橋本和佳（同志社大学大学院）

「外来語の量的変化の測定」

中道知子ほか（大東文化大学 中道ゼミ）

「連用形転成名詞の新用法について」

【講演】

森田良行先生

「ことばの意味分析・意味記述から見えてくること」

【第26回】研究発表会

日時：2004年12月4日（土）13:15～17:00

会場：三省堂文化会館 2階 第3研修室

【研究発表】

李 慈鎬（早稲田大学大学院）

「『増補訂正英和字彙』における増補と訂正」

天野かおり（上智大学大学院）

「日葡辞書における生活語彙」

【シンポジウム】

『漢字文化圏 {における／から見た}」

日本語辞書』

潘 鈞（北京大学助教授）

「中国日本語学習者に求められる日本語辞書」

陳 世娟（元東呉大学講師）

「理想的な日本語辞書」

李 漢燮（高麗大学教授）

「韓国人日本語学習者から見た日本語辞書」

【第27回】研究発表会

日時：2005年6月25日（土）13:30～17:00

会場：新宿 NSビル 13階 東ブロック B会議室

【研究発表】

石恩 京（立教大学）

「辞書における複合動詞の後項動詞の意味記述について」

柴田 実（NHK放送文化研究所）

「ATOK2005 カナ漢字変換システムに搭載する専門語辞書の製作」

【講演】

馬瀬良雄先生

「方言辞典作成への道—長野県方言辞典作成の過程で—」

【第28回】研究発表会

日時：2005年11月26日（土）13:20～17:00

会場：新宿 NSビル 13階 西ブロック H会議室

【研究発表】

山崎 誠（国立国語研究所）

「現代雑誌の語彙調査」

伊藤雅光（国立国語研究所）

「計量国語学史ことはじめ」

【講演】

林 四郎先生

「句末連辞の記述を思い立って」

【第29回】研究発表会

日時：2006年6月24日（土）13:30～17:00

会場：新宿 NSビル 13階 東ブロック B会議室

【研究発表】

永澤 濟（東京大学大学院）

「副詞『明らか』の意味・用法の変化」

安田尚道（青山学院大学）

「『神かみ』は『上かみ』と同源とする説について」

【講演】

秋永一枝先生

「東京弁を追いかけて」

【第30回】研究発表会

日時：2006年11月25日（土）13:00～17:00  
会場：新宿NSビル13階 東ブロックB会議室  
[シンポジウム]  
『漢字と辞書』  
林 史典（聖徳大学）  
「日本人と辞書」  
湯浅茂雄（実践女子大学）  
「近代辞書と漢字・漢語」  
沖森卓也（立教大学）  
「現代生活と辞書」  
蔣 垂東（文教大学）  
「外国から見た日本語辞書」

【第31回】研究発表会

日時：2007年6月30日（土）13:15～17:00  
会場：新宿NSビル13階 東ブロックB会議室  
[研究発表]  
郭 木蘭（東洋大大学院）  
「『今昔物語集』における食関係の漢語」  
許 永新（東京大大学院）  
「国語辞典における自他動詞の認定」  
押尾和美（国際交流基金日本語国際センター漢  
字表・語彙表部会）  
「日本語能力試験のための語彙表作成—中間  
報告—」  
[講演]  
宮島達夫先生  
「用例中心の辞典」

【第32回】研究発表会

日時：2007年12月1日（土）13:15～17:00  
会場：新宿NSビル13階 東ブロックB会議室  
[シンポジウム]  
『敬語』  
林 史典（聖徳大学）  
「現代敬語の問題点」  
佐藤 宏（小学館）  
「敬語の分類と国語辞典」  
関根健一（読売新聞東京本社）  
「報道文の中の敬語」  
川口義一（早稲田大学）  
「外国語としての敬語学習の支援」

【第33回】研究発表会

日時：2008年6月14日（土）13:15～17:00  
会場：新宿NSビル13階 東ブロックB会議室  
[研究発表]  
清水泰生（(社)日本マスターズ陸上競技連合）  
「スポーツ用語の変遷—陸上競技を中心に—」  
池原陽斉（東洋大）  
「半井本『保元物語』の文体—語彙検討から  
のアプローチ」  
中道ゼミ（大東文化大）  
「『にやける』の語義について」  
[講演]  
飛田良文先生  
「辞書編集上の諸課題」

【第34回】研究発表会

日時：2008年11月22日（土）13:30～17:00  
会場：エステック情報ビル21階 A会議室  
[シンポジウム]  
『日本語の外来語と外行語』  
金 愛蘭（国立国語研究所）  
「基本語化する外来語—借用・定着の先に—」  
石井正彦（大阪大学）  
「借りる／借りない」の最前線—JST・科学  
技術文献情報の場合—」  
青木三郎（筑波大学）  
「フランス語のなかの日本文化—ジャポニズ  
ムからマンガまで」  
伊藤雅光（国立国語研究所）  
「J-pop と MangAnime のなかの日本語と外  
国語」

【第35回】研究発表会

日時：2009年6月13日（土）13:30～17:00  
会場：新宿NSビル3階 305会議室  
[研究発表]  
星野初枝（昭和女子大）  
「テクニカルライティングにおける用語の扱い」  
町田 互（立教大学）  
「国語辞書における品詞分類—ノ形容詞につ  
いて—」  
[講演]  
土屋信一先生  
「現代語における江戸語研究の必要性」

〈資料〉第1回～第59回研究発表会 記録

【第36回】研究発表会

日時：2009年11月14日（土）13:30～17:00

会場：新宿NSビル 3階 南308会議室

〔シンポジウム〕

『新語の諸相』

木村義之（慶應義塾大学）

「新語辞典の形成と展開」

田中牧郎（国立国語研究所）

「外来語の定着のために」

中道知子（大東文化大学）

「キャンパスのことば」

飯間浩明（早稲田大学）

「インターネットの新語」

〈司会〉伊藤雅光

【第37回】研究発表会

日時：2010年6月12日（土）13:30～17:00

会場：新宿NSビル 3階 南308会議室

〔研究発表〕

原田幸一

（一橋大学大学院言語社会研究科博士後期課程）

「大学生の日常会話における『たしかに』の  
意味・用法」

石川慎一郎（神戸大学）

「日本語複合動詞「だす」と「でる」につい  
て：コーパスを用いた辞書記述の精緻化」

〔講演〕

佐藤亮一先生

「方言における意味認識について」

【第38回】研究発表会

日時：2010年11月20日（土）13:30～17:00

会場：新宿NSビル 3階 南308会議室

〔シンポジウム〕

『コンピュータを用いた

日本語研究における辞書の役割』

宇津呂武仁（筑波大学）

「自然言語処理における日本語機能表現の解析」

仁科喜久子（東京工業大学）

「日本語コーパスに基づいた日本語学習支援  
システム」

伊藤雅光（大正大学）

「歌詞自動生成システムによるテーマ生成語  
彙論」

矢澤真人（筑波大学）

「日本語変換システムと国語辞典」

【第39回】研究発表会

日時：2011年6月11日（土）13:30～17:00

会場：新宿NSビル 3階 南308会議室

〔研究発表〕

阿保きみ枝（一橋大学大学院）

「JSL生徒のための数学文章題の用語解説開  
発の試み」

岸本恵実（京都府立大学）

「原典との対照によるキリシタン版『羅葡日  
辞書』日本語研究の試み」

〔講演〕

中村 明先生

「語感のことなど—語感要素をめぐる随感—」

【第40回】研究発表会

日時：2011年11月12日（土）13:30～17:00

会場：新宿NSビル 3階 南308会議室

〔第40回記念シンポジウム〕

『国語辞書の100年—歴史と展望—』

倉島節尚（元大正大学）

「現代国語辞書の誕生」

野村雅昭（元早稲田大学）

「21世紀の国語辞書」

沖森卓也（立教大学）

「近年の国語辞書の周辺動向」

砂川有里子（筑波大学）

「日本語学習辞書の特徴」

【第41回】研究発表会

日時：2012年6月9日（土）13:20～17:00

会場：新宿NSビル 3階 南3G会議室

〔研究発表〕

中川秀太（十文字学園女子大学短期大学）

「接尾辞的用法における類義の一字漢語と二  
字漢語について」

シュテファン・ペスラ（マルティンルター大学  
ハレ・ヴィッテンベルク大学院博士課程）

「上代日本語の母音体系とアルタイ語族の母  
音調和との関係」

高山林太郎（東京大学大学院博士課程）

「四モーラ豊語を音調と意味で分類する試み」

〔講演〕

倉持保男先生

『新明解国語辞典』と40年——光と影」

【第42回】研究発表会

日時：2012年11月17日（土）13:20～17:00

会場：新宿NSビル 3階 南3J会議室

〔シンポジウム〕

『「国語」教育と辞書』

廣川加代子（東京学芸大学）

「学習者たちの辞書利用——小学校の現場から」

福本元恵（渋谷区立原宿外苑中学校）

「認識と思考の扉を開く語彙・語句学習——辞書に慣れ親しみ学びの自立を促す工夫」

篠崎晃一（東京女子大学）

「学習辞書に求められるもの」

山下直（文部科学省）

「新学習指導要領と国語力の強化」

〈司会〉林史典（聖徳大学）

【第43回】研究発表会

日時：2013年6月8日（土）13:15～17:00

会場：新宿NSビル 3階 南3G会議室

〔研究発表〕

石塚直子（筑波大学大学院）

「品詞認定に対するコーパス利用の貢献」

鄭艶飛（白百合女子大学大学院）

『「濫妨」と『濫妨狼藉』について』

石川創（駒沢女子大学人文学部講師）

「現代日本語における感動詞の認識について」

〔講演〕

山口佳紀先生

「古典の注釈と辞書の記述——『伊勢物語』の場合——」

【第44回】研究発表会

日時：2013年11月16日（土）13:15～17:00

会場：新宿NSビル 3階 3J会議室

〔シンポジウム〕

『危機情報の言語』

—防災のことばとその伝え方—

松坂千尋（NHK報道局編集主幹）

横山博（気象庁総務部参事官）

上村淳司（荒川区防災計画担当課長）

前田理佳子（大東文化大学外国語学部講師）

〈司会〉林史典（聖徳大学教授）

【第45回】研究発表会

日時：2014年6月14日（土）13:00～17:00

会場：新宿NSビル 3階 南3G会議室

〔研究発表〕

金澤奈央（拓殖大学大学院博士後期課程）

「日本統治下の台湾における日本語教授法について——「構成式話し方教授法」の位置づけを中心に——」

劉志偉（首都大学東京助教）

「超級日本語学習者の求める語彙シラバスに関する一試案——学習者が自ら動いて習得する語彙を中心に——」

遠藤織枝（元文教大学大学院教授）

「介護用語の平易化のために」

〔講演〕

安田尚道先生（青山学院大学名誉教授）

「国語辞典は何を記すべきか？」

【第46回】研究発表会

日時：2014年11月29日（土）13:00～17:00

会場：新宿NSビル 3階 3J会議室

〔シンポジウム〕

『辞書に載せる語、載せない語』

—辞書の見出し語をめぐって—

赤峯裕子（岩波書店『岩波国語辞典』編集担当）

奥川健太郎

（三省堂『三省堂国語辞典』編集担当）

村井康司（小学館『新選国語辞典』編集担当）

森川聡顕

（学研教育出版『学研現代新国語辞典』編集担当）

〈司会〉木村義之（慶應義塾大学教授）

【第47回】研究発表会

日時：2015年6月13日（土）13:15～17:00

会場：新宿NSビル 3階 南3G会議室

【研究発表】

南雲千香子（東京大学大学院博士課程）

「明治前半におけるフランス民法の翻訳の差異—箕作麟祥『仏蘭西法律書民法』と加太邦憲『仏蘭西民法』—」

コルクサ、アリ アイジャン

（トルコ・ネヴィシエヒウル大学 日本語・日本文学科准教授／博報財団の第9回招聘研究者／早稲田大学 外国人研究員）

「バイリンガル辞書における欠点」

平山允子・保志茂寿

（日本学生支援機構東京日本語教育センター）

「日本留学試験「日本語」（2010～2013年）の語彙調査—進学予備教育における日本語教育語彙の再検討—」

【講演】

林 史典先生（聖徳大学教授）

「〈母語の辞書〉を考えるための「日本語の親族名詞と親族呼称」

【第48回】研究発表会

日時：2015年11月7日（土）13:15～17:00

会場：新宿NSビル 3階 3G会議室

【シンポジウム】

『国語辞書の見出し語の立て方

—複合辞・造語成分などの扱いを中心に—』

矢澤真人

（筑波大学教授、『明鏡国語辞典』編集委員）

山崎 誠（国立国語研究所准教授、『三省堂国語辞典』編集委員）

田中 寛（大東文化大学教授）

井上永幸

（広島大学教授、『ウィズダム英和辞典』編者）

〈司会〉前田直子（学習院大学教授）

【第49回】研究発表会

日時：2016年6月11日（土）13:15～17:00

会場：新宿NSビル 3階 南3G会議室

【研究発表】

シャルコ・アンナ（早稲田大学大学院博士課程）

「日露戦争期の敵対関係が生み出した語彙—「征露丸」と「露助」を中心に—」

鄒 文君（立教大学大学院博士課程）

「和製漢語における音読みの造語法をめぐって—「成り果て」から漢語「成果」へを例として—」

【講演】

靄岡昭夫先生（山口大学名誉教授）

「日本古典漢語の語彙」

【第50回】研究発表会

日時：2016年11月12日（土）13:15～17:00

会場：新宿NSビル 3階 3J会議室

【第50回 記念シンポジウム】

『辞書の未来』

【第1テーマ】日本語母語話者に必要な国語辞書とは何か

小野正弘（明治大学教授）

平木靖成（岩波書店辞典編集部副部長）

【第2テーマ】紙の辞書に未来はあるか——これからの「辞書」の形態・機能・流通等をめぐって

林 史典（聖徳大学教授）

神永 暁（小学館 出版局「辞書・デジタルリファレンス」プロデューサー）

【第51回】研究発表会

日時：2017年6月10日（土）13:15～17:00

会場：新宿NSビル 3階 3G会議室

【研究発表】

張 明（学習院大学大学院 博士後期課程）

「接頭辞の副詞的用法について—過去性を持つ和語接頭辞「元」を例に—」

坂梨隆三（東京大学名誉教授）

「辞書に見られる『ずくめ』の仮名遣い」

【講演】

上野善道先生（東京大学名誉教授）

「言語に向き合う視点」

〈資料〉第1回～第59回研究発表会 記録

【第52回】研究発表会

日時：2017年11月18日（土）13:15～17:15

会場：新宿NSビル 3階 3J会議室

[シンポジウム]

『国語辞典の語釈をめぐる』

【第1テーマ】類義語をどう記述するか

〈発題〉山田 進（聖心女子大学名誉教授）＋投稿者

〈司会〉大島資生（首都大学東京教授）

【第2テーマ】いわゆる誤用を含め、本来でない意味・用法の拡大をどのように扱うか

〈発題〉山本康一（三省堂辞書出版部）＋投稿者

〈司会〉井島正博（東京大学教授）

【第53回】研究発表会

日時：2018年6月9日（土）13:15～17:15

会場：新宿NSビル 3階 3G会議室

[研究発表]

菊池そのみ・菅野倫匡（筑波大学 大学院生）

「勅撰和歌集における品詞の構成比率について」

中澤光平（国立国語研究所 プロジェクト非常勤研究員）

「方言辞典に求められるもの—与那国方言辞典作成の現場から—」

大久保克彦（株式会社 数理技研）

『大漢和辞典』専用OCRとフォントの開発」

當山日出夫（花園大学 非常勤講師）

「変体仮名と国語辞典とワープロ」

[講演]

野村雅昭先生（早稲田大学名誉教授）

「落語辞典の穴」

【第54回】研究発表会

日時：2018年11月10日（土）13:30～17:00

会場：新宿NSビル 3階 3G会議室

[シンポジウム]

『近代辞書の歩みとこれから

—明治150年の辞書世界—』

境田稔信（校正者）

木村一（東洋大学教授）

今野真二（清泉女子大学教授）

田中牧郎（明治大学教授）

〈司会〉陳力衛（成城大学教授）

【第55回】研究発表会

日時：2019年6月8日（土）13:10～17:00

会場：新宿NSビル 3階 3G会議室

[研究発表]

山田翔太（放送大学学生）

「『もてなす』の変遷～『日本国語大辞典第二版』の調査から～」

森口稔（京都外国語大学）

「日本語非母語話者向け日辞典の見出し語数の試算方法とその妥当性」

中道知子（大東文化大学）

「日本語動詞「はたく」の意味・用法—「現象素」による解釈—」

[講演]

山口仲美先生（埼玉大学名誉教授）

「平安時代の男と女のコミュニケーション」

【第56回】研究発表会

日時：2019年11月9日（土）13:15～17:00

会場：新宿NSビル 3階 3G会議室

[シンポジウム]

『国語辞書の文体・位相・語感の記述について』

〈基調講演〉

中村 明（早稲田大学名誉教授）

「空想の国語辞典—語彙・意味と文体・語感の周辺—」

〈発題〉

石川慎一郎（神戸大学教授）

「コーパス調査に基づく「文体・位相・語感」の記述の可能性—日本語学習者のための発信型辞書の開発を見据えて—」

宇野 和（お茶の水女子大学大学院生）

「接尾辞ミと「味」の特徴—近代からTwitterまでを例に—」

東中竜一郎（NTTメディアインテリジェンス研究所）

「対話システムの文体とキャラクター性」

〈司会〉

山崎 誠・柏野和佳子（国立国語研究所）

【第57回】2020年6月6日（土）中止

【第58回】2020年11月7日（土）中止

【第59回】中止

〈資料〉第1回～第59回研究発表会 記録

[運営委員]

- 井島正博 (20～ )  
伊藤雅光 (20～56)  
岩淵 匡 (1～19)  
上野善道 (1～53)  
大島資生 (41～ )  
沖森卓也 (1～ ; 庶務 1～42; 代表 54～)  
柏野和佳子 (54～ )  
木村義之 (41～ ; 庶務 43～ )  
木村 一 (57～ )  
倉島節尚 (20～53; 代表 20～29)  
坂詰力治 (1～40)  
坂梨隆三 (1～19)  
白藤禮幸 (1～19)  
砂川有里子 (20～53)  
陳 力衛 (54～ )  
野村雅昭 (1～40; 代表 1～19)  
林 史典 (1～ ; 代表 30～53)  
前田直子 (41～ )  
松岡洸司 (1～40)  
安田尚道 (1～ )  
山口仲美 (1～40)  
山崎 誠 (54～)

[事務局]

- 萩野真友子 (49～ )  
倉島節尚 (1～19)  
萩原好夫 (1～48)  
山本康一 (20～ )

(五十音順、敬称略)



## 事務局からのお知らせ

### 第 61 回研究発表会の開催について

上記研究発表会は下記の日時・会場で開催する予定です。

日時：2022 年 6 月

会場：(予定) 新宿 NS ビル 3 階 (新宿区西新宿 2-4-1 NS ビル)

多数ご来会くださるようお願い申し上げます。

### 第 61 回研究発表会の研究発表者の募集について

上記研究発表会における研究発表者を募集しております。発表者の資格は全く問いません。発表をご希望の方は、発表要旨 (約 800 字) を添えて、2022 年 2 月末日までに本会事務局までお申し込みください。審議のうえ、研究発表をご依頼いたします。

### 研究発表会のご案内について

研究発表会開催の案内を新たにご希望の方は、本会事務局までお申し込みください。

### 語彙・辞書研究会

[運営委員]	井島正博	大島資生	沖森卓也 (代表)	柏野和佳子
	木村 一	木村義之 (庶務)	陳 力衛	林 史典
	前田直子	安田尚道	山崎 誠	
[事務局]	山本康一	荻野真友子		

〒 101-8371 東京都千代田区神田三崎町 2-22-14

株式会社 三省堂 出版局内

TEL 03-3230-9734

FAX 03-3230-9542

E-mail goijisho\_sec@sanseido-publ.co.jp

<https://dictionary.sanseido-publ.co.jp/affil/goijisho/>

2021 年 12 月 5 日発行